



Title	北海道林業労働に関する研究() : 夏季斫代労働者の實態調査
Author(s)	加納, 瓦全; 小關, 隆祺
Citation	北海道大學農學部 演習林研究報告, 17(2), 523-575
Issue Date	1955-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/20725
Type	bulletin (article)
File Information	17(2)_P523-575.pdf



[Instructions for use](#)

北海道林業労働に関する研究 (IV)

夏季斫伐労働者の實態調査

加納瓦全

小關隆祺

STUDIES ON FOREST LABOUR IN HOKKAIDO (IV)

INVESTIGATION ON THE ACTUAL STATES OF FOREST LABOURERS IN SUMMER-LOGGING

By

Gazen KANO, and Takayoshi KOSEKI

目次

序言	524
I. 調査事業地の概況と調査の方法	524
II. 夏季斫伐労働力の構造	527
1. 性別に見た構造	527
2. 年齢別に見た構造	528
3. 経験年数より見た構造	529
III. 夏季斫伐労働力の給源	533
1. 職業別に見た給源	533
2. 出身地別に見た給源	537
3. 家庭内の地位別に見た給源	539
4. 農家の階層別に見た給源	541
IV. 就労の反覆と就労場所の移動	547
1. 就労の反覆状況	547
2. 就労場所の移動	549
V. 就労の動機と就労の方法	552
1. 就労の動機	552
2. 就労の方法	557
VI. 2, 3の就労状態	559
1. 遠距離移動労働者の移動状況	559

加納瓦全 北海道大學農學部 林政學 教授
小關隆祺 北海道大學農學部 林政學 助教授

2. 斫伐以外の林業労働経験	561
3. 斫伐賃収入の家計における比重	564
VII. 調査結果の總括	567
VIII. 夏冬兩季斫伐労働の比較	568
結 言	573
Summary	575

序 言

従来、北海道の斫伐事業の多くは冬季において行われ、夏季にはごく一部分が行われていたにすぎなかつた。最近になつていろいろの事情から夏季に斫伐事業を実行する向きが次第に多くなり、現在では夏季斫伐事業すなわち夏山事業のウェイトがかなり高くなつてきている。しかして、夏山と冬山とでは労働力の構造、給源をはじめ諸種の事情が異なることは当然考えられることである。とくに労働力の給源についてはかなり特徴ある差異があるように思われる。将来は労働賃金、金融その他の事情によつて夏山造材が増加する可能性が考えられるので、夏山の労働事情をよく調査して冬山と比較対照してみることは学問上興味深い課題たるのみでなく林業労働政策上重要な資料を提供するものである。

冬季斫伐事業の労働者の実態については、すでに筆者らによつて行われた調査がある*。そこで筆者らは夏季の斫伐労働者についてふたたび同様の調査を行い、前の調査結果と対照して、その差異や関連性をたしかめようと試みたわけである。

筆者らは数年前より主として実証的方法によつて北海道の林業労働に関する社会経済的研究をすすめてきたが、この報告はこの連続した研究の一部をなすものである。

調査の実行にあつて、種々の便宜を供与せられた関係営林局、営林署、北海道林務部、林務署の諸氏に深く感謝の意を表する。この研究は文部省科学研究費交付金の補助によつてなされた。

I. 調査事業地の概況と調査の方法

調査は昭和29年8月下旬より9月下旬にかけて北海道国有林および北海道有林の斫伐事業地7箇所において行つた。

調査事業地は次の通りである。

国 有 林	函館営林局	森営林署落部経営区内
	旭川営林局	名寄営林署佐久経営区内
	帯広営林局	新得営林署十勝川経営区内

* 加納瓦全・小關隆祺 北海道林業労働に関する研究 (II), 冬季斫伐労働者の實態調査。北大農學部演習林研究報告, 第15巻, 第2號, 昭和27年。

帯広営林局 陸別営林署斗満経営区内
 北見営林局 丸瀬布営林署管内
 北見営林局 留辺蘂営林署管内
 道有林 浦河林務署 浦河事業区内

各調査地とその事業の概況をみると第1表の通りである。

第1表 調査地および事業の概況

種別	調査地	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留辺蘂	浦河
	所在地	茅部郡 落部村	中川郡 中川村	上川郡 新得町	足寄郡 陸別町	紋別郡 丸瀬布村	常呂郡 留辺蘂町	浦河郡 浦河町
造材 採定 石 数	N	200	4,600	21,000	30,000	42,634	105,608	3,600
	L	9,800	9,900	4,000	400	3,018	3,147	15,400
	計	10,000	14,500	25,000	30,400	45,652	108,755	19,000
事業期間	造材	8.下~11.上	9.1~10.15	5.中~9.中	7.1~9.末	5.中~9.上	5.下~9.中	6.30~8.13
	集材	9.下~11.中	9.上~10.下	8.中~1.末	7.22~12.下	5.下~9.下	5.下~12.中	7.3~8.26
	運材	9.中~2.中 (トラック)	冬季 (馬 橇)	6.上~11.上 (軌道)	6.上~12.上 (軌道)	夏季 (軌道)	夏季 (軌道)	冬季 (トラック)
備考		2事業地よりなっている。1箇所は調査時に民間の新切りに従事していた。ひきつづき官で働くことになつている。		請負によつて事業を實行している		5事業地よりなっている。従つて事業期間は個々の事業地では異なっている。	5事業地よりなっている。従つて、事業期間は個々の事業地では異なっている。	所在地は浦河町であるが、交通は専ら横似村をへて行われる。

註 1. 造材採定石数の N は針葉樹, L は広葉樹をあらわす。

2. 事業期間の 9.1 は 9 月 1 日, 8 上は 8 月上旬, 9 末は 9 月末日をそれぞれ示す。

この調査地のうち、新得のみは請負によつて事業を行つているが、他のすべては営林署あるいは林務署が直接事業を實行する直営生産の事業地である。

事業は造材と集材およびそれに附随する道付、小屋掛などを一つの単位として行のが普通であり、トラック、軌道などによる運材は別箇の事業単位として行われることが多い。(積雪を利用して運材を行う冬山では造材、集材、運材は一つの事業として行われることが多い。)上記の各調査地はいずれもその例にしたがつて運材をきりはなして造材集材のみを事業単位としているので、この調査は造材集材の事業に限られ運材は含まれないこと

になる。したがって第1表の事業期間は造材と集材だけが調査事業地の事業期間というわけである。

元来、夏山事業という概念は極めて漠然としたものであつて、夏山と冬山の境をどこにもとめるかということは實際上困難なことが多い。事業地によつては夏から冬にかけて行うもの、夏冬通して年中ひきつづき行うものなどがあつて、夏山、冬山に区切ることが無理な場合もある。調査地の中にも事業の一部が冬季にまで残されるものがある。しかし、造材と集材の主な作業が大部分夏季を中心にする非積雪季に行われるのでこれらは夏山事業とみなしてよいと思う。

調査地の選定にあつては、道内において地域的にかたよらないように留意し、かつ各地域の代表的と思われるもののうち調査の便宜を得られる地点を選んだものである。その選定は厳密な統計的方法によつて標本として抽出したのではなく、いわゆる事例調査としてえらんだものである。したがつて、その結果を直ちに北海道の夏季斫伐労働の一般的形態とみなすことはできない。しかし、いずれの調査地も若干の地域の特例を含むものとしても、一般的包括的な形態との差はあまり大きくなく、全般を推測する資料として使用することに耐えられるものとする。

調査は一般調査と各個調査とに分れる。一般調査は各事業地について、前記の如き概況をしらべるにとどめ、労働の組織や労働条件については冬季と余り変りがないと思われるので省略した。各個調査は各事業地における労働者の全部に対し、直接、調査員が面接して聴取調査を行い、あらかじめ用意した調査票に調査員が記入する方法を用いた。

各個調査の調査項目は、労働者の性別、年齢、住所、家庭内の地位、家庭の職業、自己の職業、経験年数、従事している作業の種類、斫伐以外の林業労働経験、就労の反覆状況、就労場所の移動、就労の動機、就労の方法、賃金、労働時間、稼働期間、斫伐労働賃金の家計における比重などである。さらに農民の場合にはその経営方式、面積、家畜頭数、各自が農業に従事するか否かなどをしらべ、遠方から来た労働者の場合には遠方から来た理由、同伴者の有無などを調査した。

各個調査は各調査事業地において調査時にいた労働者の全部に対して行つたものであるが、一時的不在その他の理由によつて若干の調査もれはあつた。しかし、おおむね、調査時の労働者総数に近い。

調査労働者は第2表に示される。すなわち、各調査地において把握し得た調査客体の数を示す。

第2表 調査労働者数

調査地 種別	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊薬	浦河	合計
杣夫	21(3)	7(2)	16	13(1)	40	32	8	137(6)
人夫	23(7)	15(7)	13	17(2)	79	33	24	204(16)
馬夫	2	5(5)	3	5	14	22	9	60(5)
總數	46(10)	27(14)	32	35(3)	133	87	41	401(27)

- 註 1. 落部において總數の割合に杣夫が多いのは、伐出しの制度によるためである。伐出しでは造材と集材の行程が分離されないで、數人の組によつて行われる。
2. ()内は通勤、他は飯場に宿泊している。

II. 夏季斫伐労働力の構造

1. 性別に見た構造

夏季斫伐労働力の構造を性別にみると、女性が極めて少ないことは、斫伐労働の性質上当然のことである。斫伐労働において造材、集材の主作業を行うのは男性が大部分で、女性は炊婦が主で、まれに道付けなどの雑夫として稼働するにすぎない。

性別の構造をみると第3表の通りである。労働者を杣夫、人夫、馬夫に大別したのは各労働者が分担する生産行程の部分と使用する労働手段による分類である。

第3表 夏季斫伐労働者の性別構造

調査地 性別	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊薬	浦河	合計	
總數	男	40	27	30	32	123	84	41	377(94)
	女	6	—	2	3	10	3	—	24(6)
	計	46	27	32	35	133	87	41	401(100)
杣夫	男	21	7	16	13	40	32	8	137
	女	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	21	7	16	13	40	32	8	137
人夫	男	17	15	11	14	69	30	24	180(88)
	女	6	—	2	3	10	3	—	24(12)
	計	23	15	13	17	79	33	24	204(100)
馬夫	男	2	5	3	5	14	22	9	60

註 合計の()内は%

労働者總數401人のうち女性は24人で6%をしめるにすぎない。女性は杣夫と馬夫には1人もなく、全部が人夫である。その大部分は炊婦であるが落部の女性の中には積みおろしと道修繕人夫が加わっている。

各調査地別にみても大なる差異はみとめられない。

2. 年齢別に見た構造

斫伐労働者の構造を年齢階によつてみると、年少者および老齡者が少ないことがわかる。斫伐労働は筋肉的に重労働に属するためであつて、女性の労働者が極めて少ないのと全く同じ理由に基くものである。

年齢階別の構造をみると第4表の如くである。

第4表 夏季斫伐労働者の年齢階別構造

調査地 年齢階(才)	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊築	浦河	合計		
								實數	%	
總數	15~20	8	6	1	3	13	5	5	41	10
	21~30	12	9	13	16	46	34	19	149	37
	31~40	7	3	10	5	24	21	7	77	19
	41~50	13	6	5	8	24	19	7	82	21
	51~60	2	2	3	2	21	6	2	38	10
	61~70	3	1	—	1	5	2	—	12	3
	71~	1	—	—	—	—	—	—	1	0
	不明計	—	—	—	—	—	—	1	1	0
	計	46	27	32	35	133	87	41	401	100
柚夫	15~20	1	—	1	1	1	1	—	5	4
	21~30	5	4	7	5	8	9	4	42	31
	31~40	3	1	5	3	9	10	1	32	23
	41~50	9	1	3	4	11	8	2	38	28
	51~60	2	1	—	—	10	3	1	17	12
	61~70	1	—	—	—	1	1	—	3	2
	計	21	7	16	13	40	32	8	137	100
人夫	15~20	7	6	—	2	11	4	5	35	17
	21~30	5	3	6	7	29	12	12	74	36
	31~40	4	2	3	2	12	5	3	3	15
	41~50	4	2	1	3	12	8	2	32	16
	51~60	—	1	3	2	11	3	1	21	11
	61~70	2	1	—	1	4	1	—	9	5
	71~	1	—	—	—	—	—	—	1	0
	不明計	—	—	—	—	—	—	1	1	0
	計	23	15	13	17	79	33	24	204	100
馬夫	15~20	—	—	—	—	1	—	—	1	2
	21~30	2	2	—	4	9	13	3	33	55
	31~40	—	—	2	—	3	6	3	14	23
	41~50	—	3	1	1	1	3	3	12	20
	計	2	5	3	5	14	22	9	60	100

註 不明とあるのは調査表記入の不備にもとづくものである。以下の表中においても同様である。

総数についてみると、21～30歳が最も多く401人のうち149人で37%をしめている。31～40歳、41～50歳の層がこれについて多く、それぞれ19%、21%である。これら3階層すなわち21～50歳までを含めると77%となり、斫伐労働者の年齢層はこの層に集中していることを示している。これに対し、15～20歳は10%、61以上は3%である。(第4表中、15～20では20、19、18の者が大部分でそれ以下の者は少ない。)すなわち、青壮年者が大部分をしめて、年少者と高齢者が少ないことを示している。

この関係は調査地別にみても大なる差異はない。

職種別(杣夫、人夫、馬夫別をかりに職種別という。以下同じ。)にみると、道路修繕、炊事、薪伐りなどの雑役を含み、筋肉的に比較的軽いと考えられる人夫において、年少者の比率が杣夫、馬夫にくらべて若干高くなっていることがみとめられる。また、筋肉的に重いと考えられる杣夫、馬夫、とくに馬夫では人夫にくらべて青壮年者の比率がはるかに高くなっている。馬夫では51歳以上の者は1人もない。かくの如く職種別にみると、職種間に多少の差異はあるが、総数において指摘した傾向、すなわち、年少者、高齢者少なく、青壮年者が大部分であるという傾向は変りがない。また、これを調査地毎の職種別にみても同様の傾向が見出される。

なお表には示していないが、女性のみについて年齢階をみると、15～20歳9人、21～30歳6人、31～40歳3人、41～50歳5人、51～60歳1人となっており、15～20歳の層が24人中9人で最も多くなっている。

3. 経験年数より見た構造

斫伐労働は作業の種類によつては何等の技能も熟練も要しない単純なものもあるが、かなり高い技能と熟練を必要とする部門も少なくない。したがつて、労働力の技能的構造あるいは熟練度は最も重要視しなければならないものの一つである。しかし、実際にあつてこれらを判定し、表示することは困難である。

間接的に熟練度をあらわす指標として経験年数を採用してみた。経験年数が直ちに技能的構造や熟練度をあらわすものでないことはいうまでもないが、少なくとも重要な関連をもっていることは間違いない。

経験年数別構造を総数および職種別についてみると第5表の如くである。

総数についてみると、経験年数1年すなわち、調査時においてその年はじめて斫伐労働に就労した者は401人中59人、15%である。2～5年が最も多く125人、31%で、6～10年が105人、26%でこれについている。この両方を含めると2～10年のものが57%に達する。一方において、11年以上の者は合せて28%になる。これを調査地毎にみても、およそ同じ傾向にあることが指摘される。

第5表 夏季斫伐労働者の経験年数別構造

調査地 経験年数(年)	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊薬	浦河	合計		
								實數	%	
總數	1	8	4	4	11	17	7	8	59	15
	2~5	19	8	12	12	37	23	14	125	31
	6~10	7	5	10	5	42	23	13	105	26
	11~15	5	2	1	4	13	12	—	37	9
	16~20	3	4	2	1	10	13	1	34	9
	21~	4	3	3	2	14	9	5	40	10
	不明	—	1	—	—	—	—	—	1	0
	計	46	27	32	35	133	87	41	401	100
柿夫	1	1	—	—	1	1	3	—	6	5
	2~5	8	2	9	6	8	8	2	43	31
	6~10	4	3	5	1	16	8	3	40	29
	11~15	2	—	—	3	5	4	—	14	10
	16~20	3	1	2	1	4	4	1	16	12
	21~	3	1	—	1	6	5	2	18	13
	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	21	7	16	13	40	32	8	137	100
人夫	1	7	4	4	9	5	4	7	50	25
	2~5	11	5	2	3	27	11	10	69	34
	6~10	2	1	4	3	20	7	7	44	22
	11~15	2	1	1	1	5	5	—	15	7
	16~20	—	2	—	—	5	4	—	11	5
	21~	1	1	2	1	7	2	—	14	7
	不明	—	1	—	—	—	—	—	1	0
	計	23	15	13	17	79	33	24	204	100
馬夫	1	—	—	—	1	1	—	1	3	5
	2~5	—	1	1	3	2	4	2	13	22
	6~10	1	1	1	1	6	8	3	21	35
	11~15	1	1	—	—	3	3	—	8	13
	16~20	—	1	—	—	1	5	—	7	12
	21~	—	1	1	—	1	2	3	8	13
	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	2	5	3	5	14	22	9	60	100

註 1年というのは調査時の年にはじめてという意味である。

職種別にみると、柿夫および馬夫においては経験年数1年の者のしめる比率が総数および人夫の場合よりもはるかにひくくなり、11年以上の者の比率が逆に高くなっている。すなわち1年の者はそれぞれ5%であるが、11年以上のものはそれぞれ35%、38%となつている。人夫の場合についてみると1年の者が25%にも達しており(1年の者総数59

人のうち50人が人夫である。同時に11年以上の者の比率が19%と低くなっている。しかし、どの職種をみても2~5年が最も多く、6~10年がこれに次いでいるという関係は保たれている。なお、人夫のうち経験年数の長い者の相当数が山頭、人夫頭その他重要な職務についている者でしめられている。これらの人夫と炊婦雑夫などを同じ人夫の名で一括することは妥当ではないが、杣夫、人夫、および馬夫の分類の方法上止むを得なかつた。

職種別にみた結果は調査地毎に観察しても大きな例外なしにみとめうるものである。

これを要するに、斫伐労働者の経験年数を指標として、その技能的構造ないしは熟練度をみると、それは一般にかなり高いものと考えることが許されよう。とくに杣夫、馬夫は高く、人夫が最も低いということになる。各職種の経験年数の永さがそれらの作業に要求される技能の高さ、あるいは熟練度とほぼ一致したものであるのは当然であろう。

なお、この第5表に示された経験年数はそれぞれ、各職種についての年数を示している。すなわち、杣夫は杣夫としての経験年数を示している。したがって、斫伐労働全体としての経験年数とは多少異なっていることになる。たとえば、調査時あるいは調査の年に杣夫であつても、その前年には人夫であつた場合もあるわけであるが、この場合、人夫としての年数は加算されていないわけである。各職種毎の熟練度をみるためには、この各職種毎の年数の方が合理的であると考えられる。実際には、所有し、使用する労働手段や技能の高低および半流れ作業などの関係で、同一年内あるいは年がかわつても、同一人が2種以上の作業に従事する異種稼働はその例があまり多くないようなので、第5表を斫伐労働全体としてみた場合の経験年数と考えても大なるあやまりはないと思う。この調査において、同1人について、杣夫として何年、人夫として何年、馬夫として何年とわけて質問したのに対し、2種以上にわたつて相当永い経験年数を答えた者は山頭その他のごく少数に限られていた。

経験年数を労働者の総数および職種別にみた場合について述べたが、経験年数は職種別によつて異なるであろうということは、それらの作業の種類が要求する技能の高さが異なるということから容易に考えられるが、同時にまた、自己の職業の種類によつても異なるのではないかということが考えられる。

自己の職業別にみた場合の経験年数別構造は第6表の如くである。

林業專業者についてみると、経験年数6~10年の者が31%をしめて最も多く2~5年の者が29%となつている。また、11年以上の者が34%にもなつているが、1年のものは6%にすぎない。農業者では2~5年が40%で最も多く、1年の者がこれについて21%となつている。漁業者、日傭、その他はいずれも1年の者あるいは2~5年の者が最も多い。1~5年の者が合せて7~8割となつており年数が多くなるに従つて、比率がいちじるしく

第6表 夏季斫伐労働者の自己の職業別に見た経験年数別構造

調査地 経験年数(年)	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊薬	浦河	合計		
								實數	%	
林業	1	2	1	1	1	7	4	—	16	6
	2~5	17	2	5	6	24	19	2	75	29
	6~10	6	2	6	3	38	23	2	80	31
	11~15	4	—	1	3	10	11	—	29	11
	16~20	3	2	1	1	10	13	—	30	11
	21~	3	1	3	2	12	9	2	32	12
	計	35	8	17	16	101	79	6	262	100
農業	1	1	1	1	1	5	1	1	11	21
	2~5	2	3	5	2	6	2	1	21	4
	6~10	—	2	1	2	2	—	2	9	17
	11~15	1	—	—	—	2	1	—	4	8
	16~20	—	1	1	—	—	—	1	3	6
	21~	1	2	—	—	1	—	—	4	8
	計	5	9	8	5	16	4	5	52	100
漁業	1	—	—	—	3	—	—	—	3	43
	2~5	—	—	—	3	—	—	—	3	43
	6~10	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	11~15	—	—	—	1	—	—	—	1	14
	計	—	—	—	7	—	—	—	7	100
日傭	1	4	2	1	2	—	—	5	14	30
	2~5	—	3	2	—	2	1	11	19	42
	6~10	—	—	2	—	—	—	7	9	20
	11~15	—	1	—	—	—	—	—	1	2
	16~20	—	1	—	—	—	—	—	1	2
	21~	—	—	—	—	1	—	—	1	2
	不明 計	— 4	1 8	— 5	— 2	— 3	— 1	— 1	1 23	1 46
その他	1	1	—	1	4	5	2	2	15	46
	2~5	—	—	—	1	5	1	—	7	21
	6~10	1	1	1	—	1	—	2	6	18
	11~15	—	1	—	—	1	—	—	2	6
	16~20	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	21~	—	—	—	—	—	—	3	3	9
	計	2	2	2	5	12	3	7	33	100

- 註 1. 總數については第5表の總數と同じなので省略した。
 2. 自己の職業別については第8表を参照。
 3. 自己職業別のうち不明1人があるが、これは省略した。

減少している。

農業、漁業、日傭、その他の者では経験年数11年以上の者はごく少数にすぎない。総数においては11年以上の者111人であるがそのうち91人が林業者で81%にも達する。すなわち11年以上の経験年数を持つ者は大部分林業者であるということになる。

自己の職業別にみた時、林業專業者において経験年数の長い者の比率が他に比して最も高く、経験年数の短い者の比率が最も低くなっていることは当然のことである。

農業者の場合、林業労働との結びつきがかなり深いので、漁業、日傭、その他の者よりも年数の長い者が比較的多くなっているのではないかと考えられる。

経験年数の長さによつて技術の高さあるいは熟練度を推測すると、自己の職業別にみた場合、林業專業者が最も高く、農業者がこれにつき漁業者、日傭、その他が最も低いということになる。

調査地毎に職業別にみても同様なことがいえる。

III. 夏季斫伐労働力の給源

1. 職業別に見た給源

北海道の斫伐事業においては、労働力の給源を主として農業人口にもとめてきた。冬季の斫伐労働者の大部分は農民であることはすでにたしかめられている。斫伐労働力は農業人口の農業外への完全な流出によつてまかなわれてきたのではなく、農民の一時的季節的流出であることを特徴としている。すなわち、農閑期を利用して農業外収入を得ようとする農民を主力としているのである。

しかし、斫伐事業が夏季に行われるということになると事情は多少変つてくるのではないか。すなわち、夏季では農業労働との競合が予想されるので、かりに農民が斫伐労働力の給源となつても、それは農業外への比較的完全な流出という形をとるか、または、余剰労働力の就労（農閑労働力ではない）という形をとる以外に途はなくなる。

夏季斫伐労働者の職業別構成を家庭の職業別に見ると第7表の如くである。

総数についてみると、401人のうち194人、48%が林業專業となつており約半数に近い。農業は142人、35%で林業專業についでいる。漁業、日傭、その他の比率はそれぞれ3%、5%、7%で、いずれも大なるウェイトを占めるものではない。

調査地別にみると佐久と浦河の2箇所が、農業の方が多く、林業專業がこれについているが、その他の地域ではいずれも林業專業が最も多く、農業がこれについている。

職種別にみると、杣夫は137人中94人、69%が林業で、農業は31人、23%となっている。人夫では204人中88人、43%が林業、72人、35%が農業で、日傭、その他の比率が他の職種にくらべると若干高くなっている。馬夫では農業が60人中39人、65%で最

第7表 夏季斫伐労働者の家庭の職業別構成

職業		調査地								合計	
		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊藥	浦河	實數	%	
總數	林業	25	6	13	18	80	48	4	194	48	
	農業	10	16	11	8	43	33	21	142	35	
	漁業	5	—	—	7	—	—	—	12	3	
	日傭	1	3	4	1	2	1	8	20	5	
	その他	5	2	4	—	4	4	7	27	7	
	不明	—	—	—	—	4	1	1	6	2	
計		46	27	32	35	133	87	41	401	100	
杣夫	林業	15	2	8	7	34	24	4	94	69	
	農業	3	5	7	2	5	6	3	31	23	
	漁業	3	—	—	4	—	—	—	7	4	
	日傭	—	—	1	—	—	1	—	2	2	
	その他	—	—	—	—	—	1	—	1	0	
	不明	—	—	—	—	1	—	1	2	2	
計		21	7	16	13	40	32	8	137	100	
人夫	林業	10	3	3	10	43	19	—	88	43	
	農業	5	8	4	2	28	10	15	72	35	
	漁業	2	—	—	3	—	—	—	5	3	
	日傭	1	3	3	1	2	—	7	17	8	
	その他	5	1	3	1	4	3	2	19	9	
	不明	—	—	—	—	2	1	—	3	2	
計		23	15	13	17	79	33	24	204	100	
馬夫	林業	—	1	2	1	3	5	—	12	20	
	農業	2	3	—	4	10	17	3	39	65	
	漁業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	日傭	—	—	—	—	—	—	1	1	2	
	その他	—	1	1	—	—	—	5	7	11	
	不明	—	—	—	—	1	—	—	1	2	
計		2	5	3	5	14	22	9	60	100	

も多く、林業がこれについて20%となつている。ここで日傭の総数20人のうち17人が人夫として就労していることが注目される。調査地毎に職種別をみると、杣夫と人夫では佐久と浦河の例外を除くと合計の示す傾向と同様な状態を示しており、馬夫では新得を除いて各地とも合計と同様になつている。

地域別に見ると、1、2の例外はあるが、大体において、夏季斫伐労働者を家庭の職業別にみると、林業専業が約半数をしめ、農業がこれにつぎ、日傭その他の比率はあまり高

くないというる。この傾向は杣夫において最も著しく、馬夫では林業と農業とが逆の割合になつている。また人夫の場合、日傭その他の比率が杣夫の場合よりもいくらか高い。日傭が大部分人夫として稼働しているがこれは技能の程度および労働手段の関係から当然であろう。

なお、職業別のうち、その他は公務員、鉄道員、土工夫、大工、指物師、斫伐請負、枋屋、浴場、無職、陸上小運搬などである。馬夫のその他は大部分陸上小運搬業者である。

以上は夏季斫伐労働者の家庭の職業別構成であるが、労働者の中には家庭の職業と本人の職業とが一致していない場合がある。その例はあまり多くはないと思われたが、調査の結果はこれら二つの職業別比率にかなり大きな差異がみいだされた。つぎに自己の職業別構成を示して家庭の職業別構成と比較してみよう。第8表の示す所である。

第8表 夏季斫伐労働者の自己の職業別構成

調査地 職業		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊藥	浦河	合計	
									實數	%
總數	林業	35	8	17	16	101	79	6	262	65
	農業	5	9	8	5	16	4	5	52	13
	漁業	—	—	—	7	—	—	—	7	2
	日傭	4	8	5	2	3	1	23	46	12
	その他	2	2	2	5	12	3	7	33	8
	不明計	—	—	—	—	1	—	—	1	0
		46	27	32	35	133	87	41	401	100
杣夫	林業	18	3	9	8	38	29	5	110	80
	農業	3	4	6	1	2	2	3	21	15
	漁業	—	—	—	4	—	—	—	4	3
	日傭	—	—	1	—	—	1	—	2	2
	計	21	7	16	13	40	32	8	137	100
人夫	林業	17	4	6	7	50	28	—	112	55
	農業	1	3	2	1	14	2	1	24	12
	漁業	—	—	—	3	—	—	—	3	2
	日傭	4	8	4	2	3	—	22	43	21
	その他	1	—	—	4	11	3	1	21	10
	不明計	—	—	—	—	1	—	—	1	0
		23	15	13	17	79	33	24	204	100
馬夫	林業	—	1	2	1	13	22	1	40	66
	農業	1	2	—	3	—	—	1	7	12
	日傭	—	—	—	—	—	—	1	1	2
	その他	1	2	1	1	1	—	6	12	20
	計	2	5	3	5	14	22	9	60	100

自己の職業別構成をまず総数についてみると、林業が401人中262人で65%である。農業はわずか52人、13%にすぎず、日傭の12%と大差がなくなっている。これを家庭の職業別の場合と比較すると林業が194人、48%から262人、65%と実に68人の増加を示しているのに対し、農業は142人、35%から52人、13%と90人の大減少を示し、職業別構成に大なる変化をもたらしている。(特に人夫、馬夫で大減少を示している。)また、日傭は20人から46人、その他は27人から33人に増加している。この関係を調査地別にみると、陸別はあまり変化がなく、むしろ林業と農業の両方が減少しているが、その他の地域ではいづこも、林業、日傭、その他が増加し、農業は著しく減少している。陸別の場合のはに述べる如く家庭の職業が林業もしくは農業の者で、自分は無職であるという者(主に炊婦)があつたため、林業、農業が減少し、その他が増加したわけである。

この関係を職種別に検討してみると、袖夫では農業が減少して林業が増加し、人夫では農業が減少して林業、日傭、その他が増加している。なお、日傭の総数46人のうち34人が人夫であることが目立っている。馬夫は家庭の職業別の場合には農業が65%もあつたのであるが、自己の職業別では全く逆に林業が20%から66%に増加し、農業は65%から12%に減少していて、最も著しい変化をみせている。調査地毎に職種別の関係をみても、いづこも同様な傾向を示していて、地域間に大なる差異はない。ただ、陸別の人夫が他の地域と異なつて、林業が少しく減少し、日傭、その他が増加しているのを認めるだけである。これは家庭の職業が林業、農業の者で、自分は無職である炊婦などをその他、日傭の分類に入れたためである。

自己の職業別に見た場合と家庭の職業別に見た場合のこのような著しい変化は、家庭の職業が農業である者の多くが自己の職業としては林業、日傭、その他に従事しているためと考えられ、これはもうすでに農業人口の一時的季節的流出ではなしに、むしろ農業人口からの比較的完全な流出の過程にあるものとみてよいと思う。そしてこれは夏季斫伐労働に就労する農家出身者の家庭は比較的下層に属するため、このような流出が可能であると同時に、それが必然的になつてくるのではないだろうか。

のちに述べる如く夏季斫伐労働力を供給する農家は一般的に低い階層に属する者が多く、中には農家の世帯主でありながら、自分は農業に従事せず、林業専門になつている者もある。

家庭および自己の職業別構成の相違の示す、このような事実は、林業の専門労働者というものが比較的下層の農家人口の農業外流出によつて形成されるということを示していると考えることが許されるのでないか。現在、家庭の職業が林業である者がもともと農業人口に由来したものであるということ、この事実から直接ひきだすことはできないが、この事実の多少の推測を加えれば、夏季斫伐労働者の林業専門者のかなりの部分が農業人

口に由来していると考えてよいと思う。

しかし、このようにして生じた夏季斫伐労働者の林業專業者も、夏季に斫伐事業が行われない場合には、潜在的過剰人口としてもとの農村に吸収されるか、日傭労働者となるか、または失業者となるものと考えられる。その意味ではなお不安定な流出である。

2. 出身地別に見た給源

夏季斫伐労働者の職業別給源はその大宗が林業專業者にあり、農民がこれについていることがたしかめられたが、つぎに現住所調査により出身地別構成をみることにしよう。出身地別構成によつて斫伐労働市場の広さをみようというわけである。元来、労働市場は本質的に地方市場であり、比較的狭い地域の中で労働力の需要と供給が行われる。出身地別構成は第9表の示すところである。

第9表 夏季斫伐労働者の出身地別構成

調査地 出身地		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊榮	浦河	合計	
									實數	%
總數	村内	35	19	8	16	67	83	15	243	61
	近村	1	7	4	7	41	1	20	81	20
	遠村	5	1	13	8	19	2	5	53	13
	道外	5	—	7	4	6	1	1	24	6
	計	46	27	32	35	133	87	41	401	100
柚夫	村内	14	3	1	5	17	30	7	77	56
	近村	—	4	—	2	10	1	1	18	13
	遠村	2	—	12	6	9	1	—	30	22
	道外	5	—	3	—	4	—	—	12	9
	計	21	7	16	13	40	32	8	137	100
人夫	村内	19	11	5	11	37	31	6	120	59
	近村	1	3	3	—	30	—	16	53	26
	遠村	3	1	1	2	10	1	1	19	9
	道外	—	—	4	4	2	1	1	12	6
	計	23	15	13	17	79	33	24	204	100
馬夫	村内	2	5	2	—	13	22	2	46	75
	近村	—	—	1	5	1	—	3	10	18
	遠村	—	—	—	—	—	—	4	4	7
	計	2	5	3	5	14	22	9	60	100

- 註 1. 村内とは事業地の所在する町村内を示し、近村とはその隣村あるいは交通的に極めて便利な近距離の村を含む。遠村はそれ以外の道内の町村である。境界が隣りあつていても地形上遠く迂廻するときは遠村とした。
2. 浦河の所在地は行政的には浦河町に屬するが、交通はすべて類似村を通じてなされるので、この2町村を村内として集計した。

総数についてみると、401人中村内が243人、61%で最も多く、近村が81人、20%でこれについている。村内と近村で81%を供給していることになる。北海道では市町村の区域が広大であるため、場所によつては同一町村内よりも隣りの方が交通的に近い場合もあり、村内と近村を一括して地元としてあつかえば、夏季斫伐労働者は出身地別にみると大部分が地元から供給されるとみてよい。遠村、道外などの遠距離移動は比較的少ないが、両者を合すると20%に近い。遠くなるにしたがつて少なくなる。調査地毎にみると新得が例外的な形を示すほかは、各地とも総数と同様な傾向を示している。新得は請負によつて事業を行つており、その労働者は業者と特殊なしかも密接な結びつき方をしていることが多いのであるが、その出身地は遠村は雨竜郡、道外は青森県が主である。

職種別にみると、杣夫と人夫の場合は総数とあまり異ならない傾向を示しているが、杣夫の方が人夫の場合よりも若干遠距離の比重が重くなつてきているようである。これに対し馬夫はとくに村内および近村の比率が高くなつてきているが、これは馬および馬道具を伴つた移動であるため当然のことであろう。調査地毎に各職種別をみると、杣夫において新得が例外的な形を示すほかは各地とも同じ傾向をあらわしている。人夫と馬夫においても、大体において地元が最も多いという同様な傾向を示しているが、馬夫の浦河では9人のうち4人が遠村となつていて村内、近村のいずれよりも多くなつてきている。馬夫の遠村は各地を通じてこの4人のみであり、唯一の例外となつてきているが、その出身地は4人とも全部、十勝国広尾町である。なお、馬夫の道外は1人もいない。

第7表と第9表によつて、夏季斫伐労働者は事業地附近の町村の林業專業者によつて大部分が充足され、地元の農民がこれにつぐということが推測されるのであるが、これをさらに確かめるために、出身地と家庭の職業を組合せて第10表を作成した。

各調査地の合計でみると、村内の林業が401人中135人、34%、村内の農業が72人で18%、近村の農業が49人で12%で、この順となつてきている。村内および近村の林業者は合せて39%となり最も多く、村内および近村の農業が合せて30%でこれについている。

調査地別にみると、落部、留辺蘂は村内の林業が最も多く村内の農業がこれについている。陸別、丸瀬布は村内の林業が最も多く近村の農業がこれについている。職業別にみたととき農業の方が林業より多かつた佐久と浦河は(第7表参照)、ここでも少し変つた形を示し、佐久は村内の農業、近村の農業の順となつており、浦河は近村の農業、村内の農業の順となつてきている。近村と村内を合せて、地元として考えれば、落部、陸別、丸瀬布、留辺蘂はいずれも地元の林業が最も多く、地元の農業がこれにつぐという典型的な形を示している。佐久と浦河は同様に近村と村内を合せて考えれば、地元の農業者が最も多い型になる。出身地別において特殊な形を示した新得は(第9表参照)ここでも遠村および道外の林業、農業の多い例外的な形を示している。

第10表 夏季斫伐労働力の職業別出身地別構成

出身地	落 部					佐 久					新 得				
	村内	近村	遠村	道外	計	村内	近村	遠村	道外	計	村内	近村	遠村	道外	計
林業	17	—	3	5	25	4	2	—	—	6	2	2	7	2	13
農業	9	—	1	—	10	11	5	—	—	16	1	—	5	5	11
漁業	4	1	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
日傭	1	—	—	—	1	3	—	—	—	3	1	2	1	—	4
その他	4	—	1	—	5	1	—	1	—	2	4	—	—	—	4
不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	35	1	5	5	46	19	7	1	—	27	8	4	13	7	32

出身地	陸 別					丸 瀬 布					留 邊 薬				
	村内	近村	遠村	道外	計	村内	近村	遠村	道外	計	村内	近村	遠村	道外	計
林業	14	2	2	—	18	48	15	13	4	80	47	—	1	—	48
農業	2	5	—	1	8	12	24	5	2	43	30	1	1	1	33
漁業	—	—	4	3	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
日傭	—	—	1	—	1	2	—	—	—	2	1	—	—	—	1
その他	—	—	1	—	1	2	1	1	—	4	4	—	—	—	4
不明	—	—	—	—	—	3	1	—	—	4	1	—	—	—	1
計	16	7	8	4	35	67	41	19	6	133	83	1	2	1	87

出身地	浦 河					合 計 (實數)					合 計 (%)				
	村内	近村	遠村	道外	計	村内	近村	遠村	道外	計	村内	近村	遠村	道外	計
林業	3	1	—	—	4	135	22	26	11	194	34	5	6	3	48
農業	7	14	—	—	21	72	49	12	9	142	18	12	3	2	35
漁業	—	—	—	—	—	4	1	4	3	12	1	0	1	1	3
日傭	2	5	—	1	8	10	7	2	1	20	2	2	0	0	5
その他	2	—	5	—	7	17	1	9	—	27	4	0	2	—	7
不明	1	—	—	—	1	5	1	—	—	6	1	0	—	—	2
計	15	20	5	1	41	243	81	53	24	401	61	20	13	6	100

このように、夏季斫伐労働者の出身地別、職業別構成を調査地ごとに分けてみると、各地にそれぞれ多少の特徴を有しており、一概にいうことはできないが、一般的には、地元の林業者が最も多く、地元の農業者がこれにつぐという傾向を認めることはできよう。

3. 家庭内の地位別に見た給源

労働者の家庭内における地位を、家庭の職業と組合せて見ると、第11表の如くである。労働者の家庭の職業は林業が最も多く、農業がこれについていることは上述の如くであるが、ここでは職業ごとに家庭内の地位別を検討して、いかなる職業の労働者ではいか

第11表 夏季研伐労働者の家庭の職業別に見た家庭内の地位別構成

調査地 家庭内の地位		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊薬	浦河	合計	
									實數	%
總數	世帯主	27	13	18	22	81	56	20	237	59
	長男	7	7	6	5	22	16	10	78	18
	主婦	3	—	2	3	5	1	—	14	4
	次三男	5	7	5	4	20	13	7	61	15
	その他	4	—	1	1	5	1	—	12	3
	不計	—	—	—	—	—	—	4	4	1
	計	46	27	32	35	133	87	41	401	100
林業	世帯主	20	5	12	13	67	44	3	164	85
	長男	2	—	1	1	4	2	—	10	5
	主婦	3	—	—	3	3	—	—	9	5
	次三男	—	1	—	1	5	2	—	9	5
	その他	—	—	—	—	1	—	—	1	0
	不計	—	—	—	—	—	—	1	1	0
	計	25	6	13	18	80	48	4	194	100
農業	世帯主	3	5	3	3	13	10	4	41	29
	長男	4	6	4	2	17	13	8	54	38
	主婦	—	—	1	—	1	—	—	2	1
	次三男	2	5	2	3	11	10	6	39	28
	その他	1	—	1	—	1	—	—	3	2
	不計	—	—	—	—	—	—	3	3	2
	計	10	16	11	8	43	33	21	142	100
漁業	世帯主	3	—	—	4	—	—	—	7	58
	長男	—	—	—	2	—	—	—	2	17
	次三男	2	—	—	—	—	—	—	2	17
	その他	—	—	—	1	—	—	—	1	8
	計	5	—	—	7	—	—	—	12	100
日傭	世帯主	1	2	2	1	1	1	7	15	75
	長男	—	—	1	—	—	—	1	2	10
	主婦	—	—	1	—	—	—	—	1	5
	次三男	—	1	—	—	1	—	—	2	10
	計	1	3	4	1	2	1	8	20	100
その他	世帯主	—	1	1	1	—	1	6	10	37
	長男	1	1	—	—	—	—	1	3	11
	主婦	—	—	—	—	1	1	—	2	8
	次三男	1	—	3	—	1	1	—	6	22
	その他	3	—	—	—	2	1	—	6	22
	計	5	2	4	1	4	4	7	27	100

註 家庭の職業不明の者6人については省略した。

なる地位にある者が多く斫伐労働に出役するかをみようというわけである。

総数についてみると、401人のうち237人、59%が世帯主で最も多く、73人、18%が長男でこれについている。世帯主と長男に主婦を加えると80%をこえ、家庭内において重大な責任を有する者の就労が大部分であることを示している。とくに世帯主が最も重要な比重を持つていることがわかる。これは後述することによつても容易にわかる如く、夏季斫伐労働では林業専門者の割合が高くなつてゐるためであらう。次三男は15%を占めるにすぎない。各調査地別にみても、例外なしに世帯主が最も多く、長男がこれにつぐという傾向を示している。

家庭の職業別にみると、林業では194人中164人、85%が世帯主となつており、長男、主婦、次三男などはそれぞれ5%にすぎない。林業では世帯主に集中しているのに対し、農業では全く対蹠的で、世帯主29%、長男38%、次三男28%というように比較的分散した形を示している。これは家庭の職業が農業である者の副業性あるいは兼業性のあらわれであると同時に、比較的低い階層の農家の労働力過剰の結果ではないだろうか。漁業、日傭、その他では人数が少ないので断定はできないが、世帯主が最も多い形をとつてゐるといえよう。しかしその傾向は林業専門者はど著しくはない。

家庭の職業別にみたこのような関係は各調査地ごとにみても、大体において例外がないようである。

なお、家庭内の地位別でその他とは主婦以外の女性などである。

4. 農家の階層別に見た給源

夏季斫伐労働者の総数401人のうち家庭の職業が林業の者が最も多く、194人、48%をしめており、農業がこれについて142人、35%をしめていることは第7表に示した通りである。農業者のしめる割合は冬季の場合ほど高くはないが、それでもかなりのウェイトを持つてゐることは確かである。つぎにその農家はいかなる階層に属しているかについて検討してみよう。

農家の階層区分は簡単にはできないが、経営面積や大家畜所有頭数などによつてみるのが便利である。農家出身者142人のうち道外の農民9人を除いて、133人の道内農家出身者についてみることにする。

まず、農家の経営規模を耕地面積に代表させて、規模別にみると第12表の如くである。

総数についてみると、農家出身者133人中、46人、35%が3町未満で最も多く、3~4町がこれにつぎ、経営面積が大きくなるにつれて人数は少なくなつてゐる。4町以下が63%にも達し、比較的下層農家の出身者が多いことを示している。これを調査地ごとにみ

第12表 夏季所伐労働者給源農家の経営規模別構成

調査地 耕地面積		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊桜	浦河	合計	
									實數	%
總數	3町未満	2	6	2	2	14	8	12	46	35
	3~4	3	5	1	1	13	10	4	37	28
	4~5	1	—	—	—	7	5	2	15	11
	5~6	—	3	3	—	2	6	—	14	11
	6~10	1	1	—	3	4	3	2	14	11
	10以上	—	1	—	—	1	—	1	3	2
	不明	3	—	—	1	—	—	—	4	2
	計	10	16	6	7	41	32	21	133	100
柚夫	3町未満	2	2	1	2	1	—	1	9	33
	3~4	—	2	1	—	1	2	1	7	26
	4~5	1	—	—	—	1	2	1	5	19
	5~6	—	—	3	—	—	1	—	4	15
	6~10	—	1	—	—	—	1	—	2	7
	計	3	5	5	2	3	6	3	27	100
人夫	3町未満	—	3	1	—	8	3	8	23	36
	3~4	1	3	—	—	8	2	3	17	25
	4~5	—	—	—	—	5	2	1	8	12
	5~6	—	2	—	—	2	2	—	6	9
	6~10	1	—	—	—	4	—	2	7	10
	10以上	—	—	—	—	1	—	1	2	3
	不明	3	—	—	1	—	—	—	4	5
	計	5	8	1	1	28	9	15	67	100
馬夫	3町未満	—	1	—	—	5	5	3	14	36
	3~4	2	—	—	1	4	6	—	13	33
	4~5	—	—	—	—	1	1	—	2	5
	5~6	—	1	—	—	—	3	—	4	10
	6~10	—	—	—	3	—	2	—	5	13
	10以上	—	1	—	—	—	—	—	1	3
	計	2	3	—	4	10	17	3	39	100

ると、人数の少ないところ、例えば新得、陸別でははつきりしないが、他のところでは総数と同じ傾向をみいだすことができる。

職種別にみても、3町未満が最も多く、規模が大きくなるにつれて人数が減少していくという傾向は大体において指摘できよう。柚夫、人夫、馬夫の間には、階層の構成に著しい差は認められないように思う。職種別をさらに調査地ごとにみると、人数が少ないた

めに、はつきりと指摘できないところが多いが、上記の傾向は大体において認めうるようである。

北海道における農家の標準経営規模は地域によつて、また経営方式によつてかなり異なるが、大体4~5町と考えてよい。それ故3町未満、3町以上6町未満および6町以上の3階層に分けてみると、総数でそれぞれ35%、50%、13%、柚夫では33%、60%、7%、人夫では36%、46%、13%、馬夫では36%、48%、16%となる。大体において中層が半数で、下層がこれにつき、上層が最も少ないということになる。

しかしこの中層でも3~4町が多いわけであるから、一般的に夏季斫伐労働者の出身農家の階層は低いものと考えられる。しかもものに示す如く、この農家は大部分が畑作経営であるが、畑作では一般に比較的面積が大きい傾向にあるから、とくに階層は低いとい

第13表 夏季斫伐労働者給源農家の大家育所有状況

調査地 家畜頭数(頭)		調査地							合計	
		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊蘂	浦河	實数	%
總数	0	1	2	—	—	5	1	—	9	8
	1	1	11	2	1	21	21	6	63	47
	2	3	1	4	3	7	7	5	30	23
	3	—	—	—	2	6	3	4	15	11
	4以上	1	2	—	—	2	—	6	11	8
	不明計	4	—	—	1	—	—	—	5	3
	計	10	16	6	7	41	32	21	133	100
柚夫	0	1	1	—	—	1	—	—	3	11
	1	—	3	2	1	1	5	2	14	52
	2	2	—	3	1	—	—	—	6	22
	3	—	—	—	—	1	1	1	3	11
	4以上	—	1	—	—	—	—	—	1	4
	計	3	5	5	2	3	6	3	27	100
人夫	0	—	—	—	—	3	1	—	5	9
	1	1	7	—	—	15	7	4	34	51
	2	—	—	1	—	4	1	4	10	15
	3	—	—	—	—	4	—	3	7	10
	4以上	—	—	—	—	2	—	4	6	9
	不明計	4	1	—	1	—	—	—	5	6
	計	5	8	1	1	28	9	15	67	100
馬夫	1	—	1	—	—	6	9	—	16	41
	2	1	1	—	2	3	6	1	14	36
	3	—	—	—	2	1	2	—	5	13
	4以上	1	1	—	—	—	—	2	4	10
	計	2	3	—	4	10	17	3	39	100

註 成畜のみではなく仔を含む。

うことがわかる。経営面積の大きい農家ではよほど家族数が多くて、労働力の余っている農家でなければ、夏季に他の労働に従事する余裕がないはずであるから、上記の結果はごく当然のことであろう。

つぎに同じ道内農家について大家畜の所有状況、すなわち牛馬の頭数をみると第13表の如くである。

総数についてみると1頭所有が最も多く、133人中63人、47%で、2頭所有がこれについている。所有しないのが8%に達するが4頭以上所有がやはり8%ある。これを職種別にみると袖夫と人夫では余り著しい違いがないが、馬夫の場合、人夫、袖夫にくらべて、頭数の多い農家の比率が幾分高いように思われる。所有しない者がいないのは当然である。

調査地ごとにみると前と同様に人数の少ないところでは、はつきりした傾向のあらわれないところもあるが、大体において上記と同様の状況になっている。

第12表と第13表によつて、夏季斫伐労働者のうち農家出身者は比較的低い階層から多く就労しているということがうかがわれるのであるが、いま、各調査地ごとの耕地面積の平均と大家畜所有頭数の平均をみることによつて、これをたしかめてみると第14表の通りである。

第14表 夏季斫伐労働者給源農家の平均耕地面積と平均大家畜所有頭数

調査地		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊蘂	浦河	合計
種別									
総数	耕地面積(町)	3.2	3.5	3.9	4.1	3.4	3.7	3.6	3.6
	家畜頭数(頭)	1.5	1.3	1.7	1.9	1.5	1.4	3.0	1.8
袖夫	耕地面積(町)	2.3	3.3	4.3	2.0	2.7	4.3	2.9	3.4
	家畜頭数(頭)	1.3	1.4	1.6	1.5	1.3	1.3	1.7	1.4
人夫	耕地面積(町)	4.5	3.2	2.0	不明	3.8	3.2	4.0	3.7
	家畜頭数(頭)	0.5	0.9	2.0	不明	1.5	1.0	3.1	1.8
馬夫	耕地面積(町)	3.2	4.8	—	4.2	2.6	3.7	2.8	3.7
	家畜頭数(頭)	3.0	2.6	—	2.5	1.4	1.6	4.0	2.0

註 耕地面積、家畜頭数の不明な者は除いて平均した。

総数では耕地面積平均3.6町、家畜頭数1.8頭で、これを職種別にみてもその間に著しい差はないようである。調査地ごとにみると総数ではあまり地域的な差はない。調査地ごとの職種別では各地に一定の傾向をみいだせないが、これは人数が少ないための偏差であつて、特に職種間の特徴はないのではないかと考えられる。

かくの如く、平均4町にも満たないような、比較的低い階層から多く就労しており、

とくに夏季の労働であるため、家業である農業には全く従事しないで、専ら林業その他の賃労働に従事している者がかなり多いと思われるのであるが、この間の事情は第15表に示される。

第15表 農業出身夏季斫伐労働者の自家農業従事状況

調査地 種別		調査地							合計	
		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊藥	浦河	實数	%
總數	農業に従事する	5	14	4	5	16	6	9	59	44
	農業に従事しない	1	—	2	2	21	23	11	60	45
	不明	4	2	—	—	4	3	1	14	11
	計	10	16	6	7	41	32	21	133	100
柚夫	農業に従事する	2	5	4	1	2	2	3	19	70
	農業に従事しない	1	—	1	1	1	3	—	7	26
	不明	—	—	—	—	—	1	—	1	4
	計	3	5	5	2	3	6	3	27	100
人夫	農業に従事する	1	6	—	—	11	3	4	25	37
	農業に従事しない	—	—	1	1	15	5	10	32	48
	不明	4	2	—	—	2	1	1	10	15
	計	5	8	1	1	28	9	15	67	100
馬夫	農業に従事する	2	3	—	4	3	1	2	15	38
	農業に従事しない	—	—	—	—	5	15	1	21	54
	不明	—	—	—	—	2	1	—	3	8
	計	2	3	—	4	10	17	3	39	100

総数では農業に従事する者44%、農業に従事しない者45%でほぼ同数となつている。しかし、この農業に従事する者であつても、大部分は手伝いの程度であつて、農耕作業の中心になつている者はほとんどないといつてよい。夏季に賃労働に従事しているのだから、自家の農業に従事し得ないのは当然であるし、また、逆に考えれば、農業は他の者に間に合う程度だから夏季に賃労働にでているということにもなるわけである。

なお、農業に従事しない者60人のうち14人は世帯主であるが、この点も、上に述べてきたことから裏づけているといふことができよう。

家庭の職業が農業の者は総数142人(道外を含む)であるが、これが自己の職業となると52人に激減したことはすでにのべたが(第7表と第8表)、これが第15表の自家農業従事者59人にはほぼ一致する数字を示していることは、家庭の職業が農業でありながら自己の職業はその他のものであると答えた者の大部分は、事実上自家の農業に従事していないことを示している。

第15表の職種別をみると、柚夫においては農業に従事する者の割合が他にくらべて

高くなっているが、これは家庭の職業が農業である者のうち、自己の職業が農業である者の割合が人夫、馬夫の場合にくらべて高いのに関連があるのではないと思われる。第7表と第8表によれば、その変化は袖夫で31人から21人であるのに対し、人夫では72人から24人、馬夫では39人から7人となつている。すなわち、袖夫では、自己の職業も農業である者が比較的多い。

地域ごとに職種別をみると必ずしも一致した傾向を示さないが、これもまた、少数のための偏差が強くあらわれるため、全般的にいえば上記の傾向を容認できよう。

参考のために、第12表から第15表までにあげた道内農家の農業経営方式と耕地以外の土地所有状況をみると第16表、第17表である。

第16表 夏季斫伐労働者給源農家の経営方式

調査地 種別	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊蘂	浦河	合計	
								實数	%
畑作	6	11	2	5	32	21	4	81	61
田畑兼営	—	4	3	1	8	10	9	35	26
田畑とその他兼営	1	1	1	1	1	1	8	14	11
不明	3	—	—	—	—	—	—	3	2
計	10	16	6	7	41	32	21	133	100

第17表 夏季斫伐労働者出身農家の耕地外土地所有状況

調査地 林野 牧場面積	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊蘂	浦河	合計
1町未満	—	—	—	—	1	—	—	1
1~5	2	1	1	—	8	2	7	21
5以上	—	2	1	4	2	—	2	11
計	2	3	2	4	11	2	9	33

水田単作経営はなく、畑作が61%、田畑兼営が26%、田畑とその他兼営が11%となつている。その他とは酪農、果樹園などである。耕地外の土地とは山林、原野、牧場などで、その所有者は133人中33人にすぎないばかりでなく、面積も大きくはない。

道外農家出身の労働者は9人であつたが、その出身地は青森県が最も多く、その他秋田県などが含まれている。その耕地所有面積は0.2町ないし2.0町で、平均0.7町であるが、5人までは0.5町以下である。大家畜は4人が各1頭を飼育しているにすぎなく、自家の農業に従事しない者6人を算えている。明らかに下層農家出身が多い。

IV. 就労の反覆と就労場所の移動

1. 就労の反覆状況

斫伐労働者は特定の縁故関係によつて就労することが多く、毎年大体同じような顔触れが同じ地方の斫伐労働に就労するという慣行性を有している。夏季斫伐労働者においても就労反覆の事実があるだろうということは経験年数別の構造によつても容易に推測されるのであるが、とくに林業専門者が多くなつていたので反覆ないし連続就労の傾向が強いのではないかと考えられる。

調査労働者について、本人が調査時の前年（前年度）の冬山と夏山に就労しているかどうかについてくらべた結果によつて反覆性をたしかめると第18表の如くである。

第18表 夏季斫伐労働者の就労反覆状況

種 別		調 査 地							合 計
		落 部	佐 久	新 得	陸 別	丸瀬布	留邊築	浦 河	
總數	調査労働者数 (a)	46	27	32	35	133	87	41	401
	夏冬夏連続就労者数 (b)	24	12	17	17	101	61	22	254
	冬夏連続就労者数 (c)	32	23	28	21	110	63	27	304
	b/a×100	52	44	53	48	75	70	53	63
	c/a×100	69	85	87	60	82	72	65	76
	夏夏就労者数	3	1	—	1	6	1	—	12
楠夫	調査労働者数 (a)	21	7	16	13	40	32	8	137
	夏冬夏連続就労者数 (b)	14	2	7	8	33	29	3	96
	冬夏連続就労者数 (c)	19	7	16	11	36	30	5	124
	b/a×100	66	29	44	62	83	91	38	70
	c/a×100	90	100	100	85	90	94	63	91
	夏夏就労者数	1	—	—	—	1	—	—	2
入夫	調査労働者数 (a)	23	15	13	17	79	33	24	204
	夏冬夏連続就労者数 (b)	8	7	9	6	54	21	12	117
	冬夏連続就労者数 (c)	11	11	9	6	60	22	15	134
	b/a×100	35	47	69	35	68	64	50	57
	c/a×100	48	73	69	35	76	67	63	66
	夏夏就労者数	2	1	—	1	5	1	—	10
馬夫	調査労働者数 (a)	2	5	3	5	14	22	9	60
	夏冬夏連続就労者数 (b)	2	3	1	3	14	11	7	41
	冬夏連続就労者数 (c)	2	5	3	4	14	11	7	46
	b/a×100	100	60	33	60	100	50	78	68
	c/a×100	100	100	100	80	100	50	78	77

註. 1. 夏冬夏連続就労者とは昨年夏、昨年冬と今夏（調査時）に反覆ないしは連続して就労した者をいい、冬夏とは昨年冬と今夏に連続就労した者を示す。cの中にはbが含まれている。

2. 夏夏就労者とは、昨年夏と今夏に就労し、昨年冬は就労しなかつた者をさす。

総数についてみると、労働者数401人のうち304人、76%は前年冬山にも就労し、さらに254人、63%は前年冬山と夏山の両方に反覆していることになる。冬山を除いて夏山のみを前年とその年(調査時)反覆した者は12人にすぎないがこれを加えると、401人のうち316人、78%は前年の冬山か夏山あるいはその両方に反覆ないしは連続就労してい

第19表 夏季斫伐労働者の自己の職業別就労反覆状況

種 別		調 査 地							合 計
		落 部	佐 久	新 得	陸 別	丸 瀬 布	留 邊 桜	浦 河	
林業	調査労働者数(a)	35	8	17	16	101	79	6	262
	夏冬夏連続就労者数(b)	21	5	9	13	86	55	2	191
	冬夏連続就労者数(c)	27	7	16	14	91	55	3	213
	b/a×100	60	63	53	81	85	70	33	73
	c/a×100	77	88	94	88	90	70	50	81
	夏夏就労者数	1	1	—	1	2	1	—	6
農業	調査労働者数(a)	5	9	8	5	16	4	5	52
	夏冬夏連続就労者数(b)	2	2	4	2	6	2	2	20
	冬夏連続就労者数(c)	4	8	6	3	9	4	3	37
	b/a×100	40	22	50	40	38	50	40	38
	c/a×100	80	89	75	60	56	100	60	71
	夏夏就労者数	1	—	—	—	2	—	—	3
漁業	調査労働者数(a)	—	—	—	7	—	—	—	7
	夏冬夏連続就労者数(b)	—	—	—	1	—	—	—	1
	冬夏連続就労者数(c)	—	—	—	3	—	—	—	3
	b/a×100	—	—	—	14	—	—	—	14
	c/a×100	—	—	—	43	—	—	—	43
日傭	調査労働者数(a)	4	8	5	2	3	1	23	46
	夏冬夏連続就労者数(b)	—	4	3	—	2	1	13	23
	冬夏連続就労者数(c)	—	6	4	—	2	1	16	29
	b/a×100	—	50	60	—	67	100	57	50
	c/a×100	—	75	80	—	67	100	70	63
	夏夏就労者数	1	—	—	—	1	—	—	2
其他	調査労働者数(a)	2	2	2	5	12	3	7	33
	夏冬夏連続就労者数(b)	1	1	1	1	6	3	5	18
	冬夏連続就労者数(c)	1	2	2	1	7	3	5	21
	b/a×100	50	50	50	20	50	100	71	55
	c/a×100	50	100	100	20	58	100	71	64
	夏夏就労者数	—	—	—	—	1	—	—	1

註 1. 自己の職業別不明の者1人については省略した。

2. 総数については第18表と同じなので省略した。

ることになる。調査地ごとにみても、冬夏反覆は60~87%、夏冬夏反覆は44~75%となつており反覆性がかなり強いことを証明している。

これを職種別にみると杣夫が70%と91%で最も反覆性が強く、馬夫が68%と77%でこれにつき、人夫が一番反覆性が弱く57%と66%となつているが、人夫でも半数以上が夏冬夏と反覆していることになる。杣夫、人夫馬夫間のこの傾向は地域によつては必ずしも一定していないが、概して人夫の反覆性が弱いように見られる。

杣夫の反覆性が最も強く馬夫がこれにつき、人夫が最も弱いのは、職業別構成とくに自己の職業別構成において、林業専業者のしめる比率と関係があるのではないかと思われる。自己の職業別構成において林業者のしめる比率が杣夫、馬夫、人夫の順になつており、反覆性の強さもその順となつている。専業者の方が副業者あるいは兼業者よりも就労の反覆性ないしは連続性が強いのは当然である。

そこで、夏季斫伐労働者の就労反覆状況を自己の職業別に再掲してみると第19表の如くである。

自己の職業別にみると、林業専業者においては262人中冬夏反覆は213人、81%、夏冬夏反覆は191人、73%となつていて最も反覆性が強い。その他の職業の者でも反覆性はかなり強いように思われるが、農業と漁業の夏冬夏反覆がとくに目立つて低い比率がでているのは兼業性のあらわれとみてよいのではなからうか（冬夏反覆ではかなり高い比率を示しているにかかわらず、夏冬夏反覆となると急に低くなつている）。自己の職業が農、漁業である者の夏の就労率は低くなるためであろう。また、日傭やその他の者がかなり高い反覆率を示すのは地方的な労働市場の狭さに基づいていると考えてよい。

自己の職業別の就労反覆状況を地域別にみると、大体において林業の反覆率が農業のそれよりも高いという上記の傾向を認めうるが、浦河だけはそれが逆になつている。これは浦河では林業、農業ともに人数が比較的少ないことによつて偏差が大きくなるため、このような場合の比較は困難となる。このことは他の地域または他の職業別を比較する場合にもいいうる。

2. 就労場所の移動

夏季斫伐労働者が反覆ないしは連続して就労する傾向があることは上述したとおりである。すなわち、最近の反覆状況は第18表に示されているが、総数401人のうち夏冬夏連続就労者は254人、冬夏連続就労者は304人となつている。これは401人のうち304人は前年の冬山にも就労しており、266人（夏夏の12人を夏冬夏に加えた数）が前年の夏山に就労していることをあらわしている。この前年の冬山と夏山に就労した304人と266人について、各冬山夏山の就労場所をしらべてみたのが第20表と第21表である。反覆ない

しは連続して就労する夏季斫伐労働者の就労場所の移動の距離の程度はあまりはげしくな
いだろうということは、労働者の出身地別構成（第9表）によつてもうかがうること
である。すなわち、夏季斫伐労働者の出身地が大部分地元であるという事実から反覆就労者
の場所的移動はあまり距離が遠くないと思われるのであるが、これをたしかめるために作
成したものである。

第20表は前年の冬山にも就労した者304人について、その就労場所を村内、近村お
よび遠村にわけてみたものであり、第21表は前年の夏山にも就労した者266人について
同様に就労場所をわけてみたものである。

なお、1季節（夏山または冬山の一方）において、その季節内に就労場所を2箇所以上
変更する場合はしばしばある。事業期間その他の事情によつては、1季節中に1事業地
のみに就労することができない事情がある場合があるが、その時には何回か移動するわけ
である。その間の事情は第20、21表ではわからない。

第20表 夏季斫伐労働者の就労場所の移動状況（前年冬）

種 別	調 査 地	調 査 地							合 計	
		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊藥	浦河	實數	%
總 數	調査時と同一村内または近村	19	21	17	13	88	62	14	234	77
	遠 村	13	2	10	6	11	1	12	55	18
	村内また近村と遠村の兩方	—	—	1	1	—	—	—	2	1
	不 明	—	—	—	1	11	—	1	13	4
	計（就労者數）	32	23	28	21	110	63	27	304	100
楠 夫	調査時と同一村内または近村	9	5	7	5	27	29	3	85	68
	遠 村	10	2	8	4	7	1	1	33	27
	村内また近村と遠村の兩方	—	—	1	1	—	—	—	2	2
	不 明	—	—	—	1	2	—	1	4	3
	計	19	7	16	11	36	30	5	124	100
人 夫	調査時と同一村内または近村	8	11	7	6	48	22	8	110	82
	遠 村	3	—	2	—	3	—	7	15	11
	不 明	—	—	—	—	9	—	—	9	7
	計	11	11	9	6	60	22	15	134	100
	馬 夫	調査時と同一村内または近村	2	5	3	2	13	11	3	39
遠 村		—	—	—	2	1	—	4	7	15
計		2	5	3	4	14	11	7	46	100

註 1. 村内、近村および遠村の區別は第9表における區別と同様である。

2. 村内または近村と遠村の兩方とは一事業季節にその兩方の場所に移動して就労したことを示す。

第20表によると、総数では304人のうち234人、77%が村内または近村で就労しており、遠村は55人、18%となつている。すなわち、地元間での移動が大部分であるといえよう。調査地別にみると、地域によつて地元と遠村との割合は多少異なつていても、大体において地元移動が多い。すなわち、移動距離はあまり遠くないということがわかる。

職種別にみると、杣夫の地元移動の比率が人夫や馬夫にくらべて、やや低くなり、遠村の比率が反対にやや高くなつているが、それでも半数以上が地元移動である。調査地ごとの職種別にみると、落部と新得の杣夫ならびに浦河の馬夫が例外的に遠村移動が約半数以上をしめているだけで、他はすべて地元移動が大部分である。

第20表でみると杣夫の就労場所の移動性が馬夫や人夫に比してやや強いように思われる。しかし、全般的にみると、杣夫を含めて夏季斫伐労働反覆就労者の場所移動は距離的にあまり遠くないということがいえる。

第21表すなわち、前年の夏山の場合についてみると、266人中、231人、87%が地元であり33人、13%が遠村であるにすぎない。調査地別にみても大体において地元間移動が過半をしめている。職種別にみると、第20表と同様に、杣夫の地元移動の比率が、人夫、馬夫にくらべて、やや低いようであるが、それでも地元移動がはるかに多いことになりがたい。地域別にみると、落部と新得の杣夫が例外的に遠村移動が比較的多くなつている。

第21表 夏季斫伐労働者の就労場所の移動状況(前年夏)

種 別		調 査 地							合 計	
		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊築	浦河	實数	%
總 數	調査時と同一村内または近村	16	10	12	14	101	62	16	231	87
	遠 村	11	3	5	3	5	—	6	33	13
	不 明	—	—	—	1	1	—	—	2	0
	計(就労者数)	27	13	17	18	107	62	22	266	100
杣 夫	調査時と同一村内または近村	5	1	4	5	30	29	1	75	77
	遠 村	10	1	3	2	4	—	2	22	22
	不 明	—	—	—	1	—	—	—	1	1
	計	15	2	7	8	34	29	3	98	100
人 夫	調査時と同一村内または近村	9	6	7	7	57	22	10	118	93
	遠 村	1	2	2	—	1	—	2	8	7
	不 明	—	—	—	—	1	—	—	1	0
	計	10	8	9	7	59	22	12	127	100
馬 夫	調査時と同一村内または近村	2	3	1	2	14	11	5	38	93
	遠 村	—	—	—	1	—	—	2	3	7
	計	2	3	1	3	14	11	7	41	100

註 この表の計は第18表の夏冬夏連続就労者数と夏夏就労者数との合計である。

第20表と第21表ではほとんど同じ傾向を示しており、例外的な事例までも一致している。しかし、この例外をしめした落部および新得の杣夫と浦河の馬夫においては遠村および道外の出身者のしめる比率が比較的高くなつており(第9表)、出身地構成と就労場所の移動との関連性を暗示しているようである。

夏季斫伐労働者の就労場所の移動は大体において地元移動であり、遠距離移動は比較的少ないということがたしかめられる。

V. 就労の動機と就労の方法

1. 就労の動機

夏季斫伐労働者の就労の動機をしらべてみると、第22表のとおりである。

就労の動機は多種多様にわたるが、便宜上第22表に示すように分けて集計してみた。就労の動機はただ1種とは限らず、2種以上の動機を1人の労働者が合せもつていることが少なくない。たとえば、生計の補助と農閑労力利用という動機はしばしば組合わされた形であらわれてくる。そのような場合、そのどちらかであるかをしいて区別することが困難なことがある。第22表はその場合に両方の種類の動機を平等に生かしてそれぞれのところに計上したため、その数字は労働者の実人数と一致していない。すなわち、その数字は延返答数をあらわしている。

総数についてみると、生計の主な手段という答えが最も多く、401人中223人に達し、56%をしめている。生計の補助がこれにつき160で40%である。生計の主な手段と生計の補助とを合すると96%にも達し、大部分の者はそのどちらかの答えをあげていることになる。生計の主な手段と生計の補助以外の動機はいずれも返答数が少なく、あまり重要ではないということになる。なお、表中、その他とあるのは、造材の仕事を見学にきた、仕事をおぼえにきた、山の中が好きだ、身体に良いなどという動機である。

調査地別にみると、大ていのところは生計の主な手段が最も多く、生計の補助がこれについているが、佐久と浦河においてその順序が逆になつている。佐久と浦河は家庭の職業が農業の者が林業の者よりも多くなつているためと考えられるが(第7表)、のちに述べる如く職業と斫伐労働就労の動機には密接な関係がある。

職種別にみると、杣夫では生計の主な手段の比率が他の人夫、杣夫にくらべてとくに高くなり、生計の補助の比率が低くなつている。人夫ではその両方に大差がなく、馬夫では逆に生計の補助の比率の方が高くなつてくる。この場合も職業別構成と関係が深いようである。すなわち杣夫では林業専門者が最も多く、馬夫では逆に農業者が多くなつている(第7表)。しかし、生計の主な手段と生計の補助との両方を加えた場合には杣夫、人夫、馬夫間に大差はない。

第22表 夏季斫伐労働者の就労の動機

種 別		調 査 地							合 計
		落 部	佐 久	新 得	陸 別	丸 瀬 布	留 邊 藥	浦 河	
總 數	生計の主な手段	25	12	19	19	81	52	15	223(56)
	生計の補助	17	15	12	12	48	33	23	160(40)
	農閑勞力利用	1	3	1	2	2	3	1	13
	他に仕事がない	5	—	3	9	5	—	1	23
	賃金が高い	—	—	2	4	—	—	—	6
	この仕事が得意または好き	7	—	10	4	13	—	4	38
	その他	2	—	—	3	2	—	1	8
	不明	—	—	—	—	—	2	1	3
計	57	30	47	53	151	90	46	474	
柚 夫	生計の主な手段	15	3	9	8	34	26	4	99(62)
	生計の補助	5	4	6	3	5	7	4	34(25)
	農閑勞力利用	1	2	1	—	—	1	—	5
	他に仕事がない	1	—	—	3	—	—	—	4
	賃金が高い	—	—	2	1	—	—	—	3
	この仕事が得意または好き	5	—	7	2	4	—	—	18
	その他	—	—	—	2	1	—	—	3
	計	27	9	25	19	44	34	8	166
人 夫	生計の主な手段	10	6	7	10	41	21	5	100(49)
	生計の補助	10	9	6	5	35	9	17	91(45)
	農閑勞力利用	—	1	—	1	—	2	1	5
	他に仕事がない	4	—	3	6	5	—	—	18
	賃金が高い	—	—	—	3	—	—	—	3
	この仕事が得意または好き	2	—	2	2	5	—	4	15
	その他	2	—	—	1	1	—	1	5
	不明	—	—	—	—	—	2	1	3
計	28	16	18	28	87	34	29	240	
馬 夫	生計の主な手段	—	3	3	1	6	5	6	24(40)
	生計の補助	2	2	—	4	8	17	2	35(58)
	農閑勞力利用	—	—	—	1	2	—	—	3
	他に仕事がない	—	—	—	—	—	—	1	1
	賃金が高い	—	—	—	—	—	—	—	—
	この仕事が得意または好き	—	—	1	—	4	—	—	5
	その他	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	2	5	4	6	20	22	9	68

- 註 1. 返答の延数を示す。實人數とは一致しない。1人で2種以上の理由を併記した者がいるためである。
2. 合計の()内は實人數の計に対する割合を示している。實人數は第2表に示されている。
3. 第23, 24表も同様である。

第23表 夏季斫伐労働者の家庭の職業別に見た就労の動機

種 別		調 査 地							合 計
		落 部	佐 久	新 得	陸 別	丸 瀬 布	留 邊 薬	浦 河	
林 業	生計の主な手段	19	5	12	11	68	46	4	165(72)
	生計の補助	2	1	1	4	12	1	—	21(11)
	他に仕事がない	5	—	1	5	1	—	—	12
	賃金が高い	—	—	1	—	—	—	—	1
	この仕事得意または好き	7	—	8	4	6	—	—	25
	その他	2	—	—	2	—	—	—	4
	不明	—	—	—	—	—	1	—	1
計	35	6	23	26	87	48	4	229	
農 業	生計の主な手段	3	3	2	3	12	2	3	28(20)
	生計の補助	7	13	8	5	28	30	17	108(76)
	農閑勞力利用	1	3	1	1	2	3	1	12
	他に仕事がない	—	—	1	1	3	—	—	5
	賃金が高い	—	—	—	1	—	—	—	1
	この仕事得意または好き	—	—	2	—	7	—	3	12
	その他	—	—	—	—	2	—	—	2
不明	—	—	—	—	—	1	1	2	
計	11	19	14	11	54	36	25	170	
漁 業	生計の主な手段	—	—	—	3	—	—	—	3(25)
	生計の補助	5	—	—	3	—	—	—	8(67)
	農閑勞力利用	—	—	—	1	—	—	—	1
	他に仕事がない	—	—	—	2	—	—	—	2
	賃金が高い	—	—	—	3	—	—	—	3
	その他	—	—	—	1	—	—	—	1
計	5	—	—	13	—	—	—	18	
日 傭	生計の主な手段	1	2	3	1	1	1	3	12(60)
	生計の補助	—	1	1	—	1	—	4	7(35)
	他に仕事がない	—	—	—	1	—	—	1	2
	賃金が高い	—	—	1	—	—	—	—	1
計	1	3	5	2	2	1	8	22	
そ の 他	生計の主な手段	2	2	2	1	—	3	5	15(56)
	生計の補助	3	—	2	—	3	1	1	10(37)
	他に仕事がない	—	—	1	—	1	—	—	2
	この仕事得意または好き	—	—	—	—	—	—	1	1
	その他	—	—	—	—	—	—	1	1
計	5	2	5	1	4	4	8	29	

- 注 1. 総数については第22表と同じなので省略。家庭の職業別實人数は第7表に示されている。
 2. 家庭の職業不明の者6については省略。
 3. 漁業で農閑勞力利用とあるのは半農半漁者である。

調査地別に職種別をみると、地域によつて多少の例外はあるが大体において前述した傾向にあるように思われる。ここでも職業別構成と関係があることがわかる。すなわち、職業別構成において例外的であつた調査地の職種が、就労の動機でも例外的となつていることがわかる。

上に述べた如く、就労の動機は、生計の主な手段が最も多く、生計の補助がこれにつき、その両方の動機が最も重要であることがたしかめられたが、職種別にみるよりもむしろ、職業別にみた方が意味があるように考えられるので、つぎに家庭の職業別にみた就労の動機をみることにしよう。第23表が家庭の職業別に見た就労の動機である。

第23表によると、家庭の職業が林業、日傭、その他の者において、就労の動機が生計の主な手段と答えた者が最も多く、とくに林業では194人中、165人で72%となつている。これに対し、農業と漁業では生計の補助が最も多く、農業では142人中108人で76%となつている。すなわち、農漁業と林業、日傭、その他とでは生計の主な手段と生計の補助の割合が逆になつている。生計の主な手段と生計の補助の2動機を加えた場合には各職業ごとに大差はない。

家庭の職業別に見たこの関係を各調査地ごとにみると、漁業、日傭、その他において多少、合計と異なつた傾向のところもあるが、それは少数のための偏差であつて、大部分は合計と同様な傾向を示している。とくに林業と農業は例外なしに上記の関係を示している。

農業と漁業において生計の補助が過半をしめていることは、農漁業者の就労が副業的ないしは兼業的になされるために当然生じてくる結果であろう。

就労の動機は家庭の職業と関係があると同時に労働者の家庭内の地位別によつても異なるはずである。世帯主には生計の主な手段と答える者が多いだろうし、長男、次三男以下では生計の補助と答える者が多くなると予想される。この関係をたしかめるために、就労の動機をさらに家庭内の地位別に分けて再掲すると第24表の通りである。

就労の動機を家庭内の地位別にみると、まず世帯主では実人数237人のうち194人、82%が生計の主な手段と答えており、生計の補助は34人、14%にすぎない。長男、主婦、次三男、その他では逆に生計の補助が最も多く、生計の主な手段ははるかに少なくなつている。とくに次三男では生計の主な手段と答えた者は61人中5人で、8%にすぎない。

家庭内の地位別にみた就労の動機を調査地ごとにみると、各地ともほとんど例外なしに、合計の示す割合と同様な傾向を示している。

第24表 夏季斫伐労働者の家庭内の地位別に見た就労の動機

調査地		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊薬	浦河	合計
世帯主	生計の主な手段	21	10	16	16	72	46	13	194(82)
	生計の補助	3	3	2	3	7	10	6	34(14)
	農閑勞力利用	—	1	1	—	1	1	—	4
	他に仕事がない	4	—	1	6	—	—	—	11
	賃金が高い	—	—	2	2	—	—	—	4
	この仕事が好きまたは好き	6	—	9	4	6	—	—	25
	その他	1	—	—	3	2	—	1	7
	不明	—	—	—	—	—	1	—	1
計	35	14	31	34	88	58	20	280	
長男	生計の主な手段	1	1	1	2	8	3	1	17(23)
	生計の補助	6	6	5	3	14	12	7	53(73)
	農閑勞力利用	1	2	—	—	1	2	—	6
	他に仕事がない	—	—	—	2	—	—	1	3
	賃金が高い	—	—	—	2	—	—	—	2
	この仕事が好きまたは好き	1	—	—	—	3	—	4	8
	不明	—	—	—	—	—	—	1	1
計	9	9	6	9	26	17	14	90	
主婦	生計の主な手段	1	—	—	1	—	1	—	3(21)
	生計の補助	1	—	2	2	5	—	—	10(71)
	他に仕事がない	1	—	—	—	1	—	—	2
	その他	1	—	—	—	—	—	—	1
計	4	—	2	3	6	1	—	16	
次三男	生計の主な手段	1	1	1	—	1	1	—	5(8)
	生計の補助	4	6	3	4	17	11	7	52(85)
	農閑勞力利用	—	—	—	1	—	—	1	2
	他に仕事がない	—	—	1	1	4	—	—	6
	この仕事が好きまたは好き	—	—	1	—	4	—	—	5
	不明	—	—	—	—	—	1	—	1
計	5	7	6	6	26	13	8	71	
その他	生計の主な手段	1	—	1	—	—	1	—	3(25)
	生計の補助	3	—	—	—	5	—	—	8(67)
	農閑勞力利用	—	—	—	1	—	—	—	1
	他に仕事がない	—	—	1	—	—	—	—	1
	計	4	—	2	1	5	1	—	13

註 1. 総数については第22表と同じなので省略。家庭内の地位別は第11表に示されている。
 2. 家庭内の地位不明の者4については省略。

2. 就労の方法

夏季斫伐労働者の就労の動機は上に述べた通りであるが、しからば、そのような動機をもつて就労した労働者がどのような方法で就労したかということをつしあかめてみよう。すなわち、労働者の就職過程をみようというわけである。

労働市場とくに林業労働市場は国民経済的な広がりて形成されるわけではなく、本質的に地方市場としての範囲をこえることがほとんどない。すなわち、狭い地域の中で労働

第25表 夏季斫伐労働者の就労の方法

種 別		調 査 地							合 計	
		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊榮	浦河	實 數	%
總 數	知人の紹介またはすすめ	19	13	18	17	56	28	19	170	43
	應 募	5	1	—	2	13	3	5	29	7
	例年の縁故	14	7	10	8	36	28	12	115	29
	職業安定所	—	—	—	1	2	—	—	3	0
	その他の	7	5	4	6	24	25	—	71	18
	不明	1	1	—	1	2	3	5	13	3
	計	46	27	32	35	133	87	41	401	100
袖 夫	知人の紹介またはすすめ	8	3	9	8	17	9	—	54	40
	應 募	5	—	—	2	3	1	5	16	12
	例年の縁故	5	1	4	1	11	17	3	42	30
	職業安定所	—	—	—	—	1	—	—	1	0
	その他の	2	2	3	1	8	5	—	21	16
	不明	1	1	—	1	—	—	—	3	2
	計	21	7	16	13	40	32	8	137	100
人 夫	知人の紹介またはすすめ	11	8	7	7	38	13	14	98	48
	應 募	—	1	—	—	8	2	—	11	5
	例年の縁故	7	4	5	5	17	8	5	51	25
	職業安定所	—	—	—	1	1	—	—	2	1
	その他の	5	2	1	4	13	8	—	33	16
	不明	—	—	—	—	2	2	5	9	5
	計	23	15	13	17	79	33	24	204	100
馬 夫	知人の紹介またはすすめ	—	2	2	2	1	6	5	18	30
	應 募	—	—	—	—	2	—	—	2	3
	例年の縁故	2	2	1	2	8	3	4	22	27
	その他の	—	1	—	1	3	12	—	17	28
	不明	—	—	—	—	—	1	—	1	2
		計	2	5	3	5	14	22	9	60

力の需要と供給が行われるのであり、その範囲をこえた労働者の移動は極めて限られる。このことは、出稼労働者をかなりかかえこんでいると考えられる林業労働においても総体的にみると、その数は極めて少なく、大部分は地元でまかなわれていること、また出稼労働者といつてもその移動距離は余り遠くないことなどによつても知ることができる（出身地別構成をみよ）。

狭い地方市場では組織的なしかも開放的な市場は形成され難いが、一般の商品と全く異なる性質を持つ商品たる労働力では、とくにその市場は広く開放されたものとなり難い。従つてその就職過程は組織化された市場を通ずるものは極めて少なく、縁故就職が大部分となる。

夏季斫伐労働者の就労の方法をみると第25表の示す通りである。

第25表にあげられた就労の方法を区別する項目は極めて漠然とした区分であつて、それらの間の区別が困難なことが少なくないが、返答を整理してまとめたものである。その他の中には、親、兄弟、親戚などにつれられてきた、それらを頼つてきた、自分でさがしてきた、などというのが大部分であるが、とくに親、兄弟、親戚、友人などにつれられてきたり、頼つてきた者が多い。

第25表によると、総数401人のうち170人、43%が、知人の紹介またはすすめによつて就労して最も多い。例年の縁故がこれについて多く115人、29%となつている。応募とか公共職業安定所などの公開された市場を通じて就労した者が極めて少ないのが目立つている。その他の中には前述のように縁故就労が多いのであるから、斫伐労働者の就労の方法は大部分何らかの縁故就職であるといふことができる。

この関係は調査地ごとにみても職種別にみても、さらに調査地別の職種ごとにみてもほとんど変りがない。

就労の方法を自己の職業別にみると第26表の如くである。自己の職業別にみると多少のちがいがあつても知れないと考えてしらべてみたものである。

第26表によると、林業において例年の縁故の比率が他の職業の場合よりもやや高く、農業、漁業、日傭などにおいて知人の紹介またはすすめの比率が林業の場合よりも多少高くなつていようである。しかし、全体からいへば、各職業間に大なる差異はなく、縁故就職が大部分であるということには変りがない。

調査地ごとに自己の職業別にみても各地ともこの傾向を示しているようである。

第26表 夏季斫伐労働者の自己の職業別に見た就労方法

種 別	調 査 地	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊藥	浦河	合 計	
									實 数	%
林 業	知人の紹介またはすすめ	13	1	10	5	40	24	—	93	36
	應 募	5	—	—	2	10	2	2	21	8
	例年の縁故	10	3	5	6	32	26	4	86	33
	職業安定所	—	—	—	—	2	—	—	2	0
	その他の	6	3	2	3	16	24	—	54	21
	不 明	1	1	—	—	1	3	—	6	2
計		35	8	17	16	101	79	6	262	100
農 業	知人の紹介またはすすめ	3	5	5	3	10	2	1	29	56
	應 募	—	1	—	—	2	1	3	7	13
	例年の縁故	2	2	2	1	1	1	—	9	17
	その他の	—	1	1	1	2	—	—	5	10
	不 明	—	—	—	—	1	—	1	2	4
計		5	9	8	5	16	4	5	52	100
漁 業	知人の紹介またはすすめ	—	—	—	5	—	—	—	5	72
	職業安定所	—	—	—	1	—	—	—	1	14
	不 明	—	—	—	1	—	—	—	1	14
	計	—	—	—	7	—	—	—	7	100
日 傭	知人の紹介またはすすめ	2	6	2	2	1	—	14	27	59
	應 募	—	—	—	—	1	—	—	1	2
	例年の縁故	1	2	2	—	1	1	5	12	26
	その他の	1	—	1	—	—	—	—	2	4
	不 明	—	—	—	—	—	—	4	4	9
計		4	8	5	2	3	1	23	46	100
その他	知人の紹介またはすすめ	1	1	1	2	5	2	4	16	49
	例年の縁故	1	—	1	1	1	—	3	7	21
	その他の	—	1	—	2	6	1	—	10	30
	計	2	2	2	5	12	3	7	33	100

註 1. 総数については第25表と同じなので省略。

2. 自己の職業不明の者1については省略。

VI. 2, 3 の就労状態

1. 遠距離移動者の移動状況

夏季斫伐労働者の出身別構成によれば、遠村および道外の出身者はそれぞれ53人、24人、合計77人となっている(第9表)。夏季斫伐労働者は大部分が地元の出身者である

ことはすでに明らかにされたところであるが、遠村および道外の出身者すなわち遠距離移動労働者も77人、19%に達し、無視できない比率となつている。北海道の斫伐事業は古くから府県その他からの移動労働者に負うところ少なくないが、その意味でこの遠距離移動労働者77人について、多少の検討を加えてみることにしよう。

遠距離移動労働者の家庭の職業別構成や職種別構成は第10表と第9表に示されているが、77人のうち37人が林業、21人が農業、7人が漁業、日傭が3人、その他9人となっている。職種別では柚夫42人、人夫31人、馬夫4人である。

まず、これらの労働者がとくに遠方まで移動してきた理由をみると、出身地の附近に適当な仕事がないため、適当な斫伐事業地がないため、収入が多いから、生計補助のため、縁故があつて、肉親や友人と共に、不作により生活困難のため、漁業不振、斫伐事業見学のため、農閑労力利用のためなどという理由があげられている。これらのうち、出身地の附近に適当な事業地や仕事がないためと答えた者が最も多く77人中29人となつている。すなわち、労働機会にめぐまれない地方の労働者の移動が比較的多いのではないかと思われるのである。青森県、秋田県などの東北諸県からの北海道入稼は歴史的な(沿革的な)事情もあるけれども、潜在的過剰人口の圧力と労働機会の稀少にもとづくものと考えてよいのではないか。

つぎに遠距離移動労働者が毎年遠方にてかけていくかどうかをしらべてみると第27表の通りである。

第27表 遠距離移動労働者の反覆移動状況

調査地 種別		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊蘆	浦河	合計	
									實數	%
總數	毎年遠方に行く	8	—	13	9	13	2	4	49	64
	毎年遠方に行かない	2	—	6	2	6	—	1	17	22
	不明	—	1	1	1	6	1	1	11	14
	計	10	1	20	12	25	3	6	77	100
柚夫	毎年遠方に行く	5	—	10	6	6	1	—	28	66
	毎年遠方に行かない	2	—	4	—	4	—	—	10	24
	不明	—	—	1	—	3	—	—	4	10
	計	7	—	15	6	13	1	—	42	100
人夫	毎年遠方に行く	3	—	3	3	7	1	—	17	56
	毎年遠方に行かない	—	—	2	2	2	—	1	7	22
	不明	—	1	—	1	3	1	1	7	22
	計	3	1	5	6	12	2	2	31	100
馬夫	毎年遠方に行く	—	—	—	—	—	—	4	4	100

第27表によると、毎年遠方に行くものは77人のうち49人で64%に達している。遠距離移動労働者は遠距離移動を反覆するという傾向があるといつてよいであろう。これを職種別、地域別にみても同じことがいえよう。職種間の比率をくらべても大なる差はないようである。

遠距離移動労働者が、単独で移動するか、また同伴者があつて集団で移動するかどうかについてみると第28表の通りである。これは同一の事業場にいたるまで同伴あるいは集団であることを必ずしも意味しない。すなわち、一定のところまでは一緒にきたが、その後は附近の事業地数箇所に分散したというような場合をも含んでいる。

第28表 遠距離移動労働者の同伴者数別の移動状況

調査地 同伴者数(人)	落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊禁	浦河	合計		
								實数	%	
總數	1	3	—	6	2	8	3	1	23	30
	2~10	2	—	14	5	12	—	4	37	48
	11以上	5	—	—	4	—	—	—	9	12
	不明	—	1	—	1	5	—	1	8	10
	計	10	1	20	12	25	3	6	77	100
柚夫	1	1	—	4	2	6	1	—	14	33
	2~10	1	—	11	4	3	—	—	19	45
	11以上	5	—	—	—	—	—	—	5	12
	不明	—	—	—	—	4	—	—	4	10
	計	7	—	15	6	13	1	—	42	100
人夫	1	2	—	2	—	2	2	1	9	29
	2~10	1	—	3	1	9	—	—	14	45
	11以上	—	—	—	4	—	—	—	4	13
	不明	—	1	—	1	1	—	1	4	13
	計	3	1	5	6	12	2	2	31	100
馬夫	2~10	—	—	—	—	—	—	4	4	100

第28表によると2~10人の組で移動するのが最も多く、77人中37人、48%となっている。1人すなわち単独の移動は23人、30%である。職種別にみると、馬夫4人が4人の組で移動したのが1組だけなので、これは例外であつて、比較できないが、柚夫と人夫は総数の示す割合とほとんど差はない。地域ごとにみると人数が少ないので多少の偏差はあるが、大体同じような傾向となつていていると考えてよいだろう。

2. 斫伐以外の林業労働経験

夏季斫伐労働者が斫伐以外の林業労働の経験をどの程度もつているかをみると第29

第29表 夏季斫伐労働者の斫伐外林業労働経験

種別		調査地							合計
		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊薬	浦河	
總數	造林	7	8	8	7	27	3	4	64
	森林土木	4	2	4	1	11	—	12	34
	製炭	8	1	2	4	3	—	4	22
	その他	5	—	—	4	6	2	3	20
	計(延人数)	24	11	14	16	47	5	23	140
	實人数	23(50)	10(37)	11(34)	15(42)	40(30)	5(6)	14(34)	118(29)
杣夫	造林	3	2	3	3	9	2	—	22
	森林土木	—	—	1	1	3	—	—	5
	製炭	4	1	1	4	2	—	—	12
	その他	2	—	—	2	2	1	—	7
	計(延人数)	9	3	5	10	16	3	—	46
	實人数	9	3	4	9	15	3	—	43(31)
人夫	造林	4	4	4	4	18	1	3	38
	森林土木	3	—	3	—	7	—	11	24
	製炭	4	—	1	—	1	—	2	8
	その他	2	—	—	2	4	1	3	12
	計(延人数)	13	4	8	6	30	2	19	82
	實人数	12	4	6	6	24	2	11	65(32)
馬夫	造林	—	2	1	—	—	—	1	4
	森林土木	1	2	—	—	1	—	1	5
	製炭	—	—	—	—	—	—	2	2
	その他	1	—	—	—	—	—	—	1
	計(延人数)	2	4	1	—	1	—	4	12
	實人数	2	3	1	—	1	—	3	10(17)

註 1. 1人で2種以上の仕事に稼働した者があるので、延人数は實人数よりも多くなる。

2. ()内は調査地および各職種ごとの調査労働者数に対する割合(%)を示す。

表の示す通りである。一般に斫伐労働者は斫伐以外の他の林業労働に従事することがあまり多くないように考えられるのであるが、この点は林業労働者固定策を採用する場合や専業労働者の養成などを考えるときに重要なことがらである。

第29表によると調査対象の労働者401人のうち118人、29%の人が何らかの斫伐外林業労働経験を有するにすぎない。調査地ごとにみると、留邊薬が経験者が6%と著しく低くなっているほかは30~50%である。

林業労働の種類を表の示す如く造林、森林土木、製炭およびその他の4に分けると造林が最も多くなっている。職種別にみると馬夫において17%と幾分低くなっているが、

第30表 夏季斫伐労働者の自己の職業別に見た斫伐外林業労働経験

調査地		落部	佐久	新得	陸別	丸瀬布	留邊藥	浦河	合計
種別									
林業	造林	5	3	1	4	20	3	—	36
	森林土木	2	—	1	1	11	—	—	15
	製炭	7	—	—	3	3	—	—	13
	その他	4	—	—	3	4	1	—	12
	計(延人数)	18	3	2	11	38	4	—	76
	實人数	17	3	2	10	31	4	—	67(26)
農業	造林	—	3	3	—	6	—	—	12
	森林土木	—	1	—	—	—	—	—	1
	製炭	1	1	2	—	—	—	—	4
	その他	1	—	—	—	1	1	—	3
	計(延人数)	2	5	5	—	7	1	—	20
	實人数	2	5	4	—	7	1	—	19(37)
漁業	造林	—	—	—	2	—	—	—	2
	森林土木	—	—	—	—	—	—	—	—
	製炭	—	—	—	1	—	—	—	1
	その他	—	—	—	—	—	—	—	—
	計(延人数)	—	—	—	3	—	—	—	3
	實人数	—	—	—	3	—	—	—	3(43)
日傭	造林	2	1	3	1	—	—	3	10
	森林土木	1	—	3	—	—	—	11	15
	製炭	—	—	—	—	—	—	1	1
	その他	—	—	—	—	—	—	2	2
	計(延人数)	3	1	6	1	—	—	17	28
	實人数	3	1	4	1	—	—	11	20(43)
その他	造林	—	1	1	—	1	—	1	4
	森林土木	1	1	—	—	—	—	1	3
	製炭	—	—	—	—	—	—	3	3
	その他	—	—	—	1	1	—	1	3
	計(延人数)	1	2	1	1	2	—	6	13
	實人数	1	1	1	1	2	—	3	9(27)

註 1. 總数については第29表と同じなので省略。

2. ()内は各職業ごとの調査労働者数に対する割合。

杣夫と人夫とは大差なく、それぞれ31%、32%である。

第29表によつてわかるように、斫伐労働者は一般に造林などの他の林業労働に従事することが少なく、同じ林業労働者といつても、斫伐労働に従事する労働者と造林などに

従事する労働者とは異なるグループに属するような感じがするくらいである。これら両種の労働の労働対象と労働過程のちがひ、技能の要求度などを考えると、林業労働者として一括して扱うことができないような別々の範疇を形作つていると考えた方がよいのではないかとさえ思われる。

夏季斫伐労働者の斫伐外林業労働経験を自己の職業別にみても第30表の通りである。

自己の職業別にみると林業者で経験者の比率が26%であり、農業、漁業、日傭はそれぞれ37%、43%、43%となつている。すなわち、林業者においてかえつて経験者の割合が最も低くなつている。農業者や漁業者や日傭などの副業ないしは兼業者の方が、造林などの斫伐外林業労働に就労しやすい事情にあると考えてよいだろう。日傭の大部分が人夫として斫伐労働に従事している(46人中43人)のは特に技能や道具を必要としないためであるが、彼等にとっては斫伐に従事するのも他の種類の仕事に従事するのも全く同じだと考えられる。したがつて他の仕事にも従事しやすいことになる。しかし特殊の技能と道具類をもつている斫伐専業者では日傭のように簡単に仕事を変えにくいのではないだろうか。農業者は上のような意味で専業者と日傭の中間に位するということになる。

林業、農業、漁業およびその他では造林が各種労働のうちで最も多いが、日傭では森林土木が造林よりも多くなつている。

3. 斫伐賃収入の家計における比重

斫伐労働(夏季に限らない)の賃収入が労働者の家庭の全収入のどのくらいの割合になつているかを聴取によつて調査した結果は第31表の通りである。

大ざつばな聴取によつたので必ずしも正確ではないが大よその傾向は示しているように思われる。

総数では91~100%が最も多く労働者総数の39%にもなつているが、家庭の職業が林業の者が総数の48%にも達するのであるから(第7表)当然の結果とも思われる。11~50%の者がこれにつき34%である。1割以下は6%にすぎない。

家庭の職業別にみると林業専業では91~100%の者が71%で、1~10%の者は1人もいない。農業、漁業、その他では11~50%の者が最も多く、日傭では11~50%の者と91~100%の者が同率で最高である。

調査地ごとに見た場合にはかなりの相違はあるが、大体において、斫伐賃収入の家計におけるウェイトはかなり高いというる。

第31表 夏季斫伐労働者の家計の全収入に對する斫伐賃収入の割合

比 率(%)	調 査 地	落 部	佐 久	新 得	陸 別	丸 瀬 布	留 邊 藥	浦 河	合 計	
									實 數	%
總 數	1~10	1	2	4	1	3	1	14	26	6
	11~50	21	13	10	13	38	29	14	138	34
	51~90	8	6	3	4	27	18	1	67	17
	91~100	16	5	11	11	62	39	10	154	39
	不 明	—	1	4	6	3	—	2	16	4
	計	46	27	32	35	133	87	41	401	100
林 業	11~50	6	2	1	3	12	6	2	32	16
	51~90	4	1	1	3	7	4	—	20	10
	91~100	15	3	9	10	60	38	2	137	71
	不 明	—	—	2	2	1	—	—	5	3
	計	25	6	13	18	80	48	4	194	100
農 業	1~10	1	1	4	—	2	—	10	18	13
	11~50	6	10	4	5	19	22	9	75	53
	51~90	3	3	—	1	20	11	1	39	27
	91~100	—	1	1	—	1	—	—	3	2
	不 明	—	1	2	2	1	—	1	7	5
	計	10	16	11	8	43	33	21	142	100
漁 業	1~10	—	—	—	1	—	—	—	1	8
	11~50	5	—	—	5	—	—	—	10	84
	不 明	—	—	—	1	—	—	—	1	8
	計	5	—	—	7	—	—	—	12	100
日 傭	1~10	—	—	—	—	—	—	2	2	10
	11~50	1	1	1	—	1	—	3	7	35
	51~90	—	1	2	—	—	1	—	4	20
	91~100	—	1	1	1	1	—	3	7	35
	計	1	3	4	1	2	1	8	20	100
そ の 他	1~10	—	1	—	—	1	1	2	5	18
	11~50	3	—	4	—	3	—	—	10	37
	51~90	1	1	—	—	—	2	—	4	15
	91~100	1	—	—	—	—	1	5	7	26
	不 明	—	—	—	1	—	—	—	1	4
	計	5	2	4	1	4	4	7	27	100

註. 家庭の職業不明の者6については除く。

VII. 調査結果の總括

夏季斫伐労働者について上述してきたところを要約するとつぎの通りである。

(1) 女性労働者は極めて少ない。大部分は炊婦として稼働する者であるが、まれに道直しその他の雑役に従事する者もいる。女性のしめる比率は6%である。

(2) 年齢別にみると青壮年が多く、年少者、老齡者が少ない。21~50歳が77%に達し、大部分がこの年齢階に集中している。この傾向は杣夫、馬夫においてとくに著しく、これに対し、人夫では杣夫、馬夫にくらべて年少者の比率が幾分か高くなっている。

(3) 経験年数は2~5年の者が最も多く31%に達する。6~10年の者がこれにつぐ。経験年数の長さをもつて技能的構造の高さあるいは熟練度をあらわすものと考え、夏季斫伐労働者のそれは決して低くはない。杣夫、人夫および馬夫では人夫が最も低い。

経験年数を自己の職業別にみると、林業専門者が技能的構造ないしは熟練度最も高く、農業がこれにつぎ、漁業者、日傭、その他が最も低い。

(4) 労働者の家庭の職業をみると林業専門者が48%をしめて最も多く、農業がこれについて35%である。日傭その他のしめる比率はあまり高くない。この傾向は杣夫において最も著しいが、馬夫では逆に農業の方が林業よりも多くなっている。

(5) 自己の職業をみると、林業が65%、農業が13%である。これを家庭の職業別の比率とくらべると農業が著しく減少して林業や日傭が増大していることがわかる。杣夫、人夫でも同じ傾向をあらわすが、とくに馬夫では林業が20%から66%に、農業は65%から12%に逆転している。

自己の職業別にみた場合、家庭の職業別のときよりも著しく農業が減少し林業、日傭などが増加していることは、林業専門者や日傭労働者が元来は農家の出身者であつたことを裏づけているのではないか。すなわち、農業人口の農業外流出によつて林業専門者のかなりの部分が形成されるのだろうと考えられる。

(6) 労働者の81%は村内ないしは近村の出身者である。とくに村内が最も多く61%をしめている。労働者は出身地が遠くなるに従つて次第にその比率が小さくなる。杣夫は人夫、馬夫にくらべると若干遠距離移動の比率が高い。馬夫は大部分が地元出身である。

(7) 出身地と家庭の職業を組合せて考えると、労働者の給源は調査地によつて多少の差はあるが、大体において地元の林業者が最も多く(39%)、地元の農業者がこれについている(30%)。

(8) 労働者の家庭内における地位をみると、世帯主が最も多く59%をしめ、長男、次三男の順となつている。世帯主、長男および主婦など家庭内で重要な責任を有する者の比率は81%に達する。

林業専業者では世帯主が85%にも達しているが、農業では29%にすぎない。農業では長男38%、次三男28%と比較的各地位に分散した形をとり、農業者の副業性ないし兼業性をよくあらわしている。

(9) 夏季斫伐労働者の給源となつている農家の階層を耕地面積、大家畜所有頭数などによつてみると、中層以下の農家出身者が大部分で約85%に達する。比較的低い階層の農家から多く就労しているということがわかる。杣夫、人夫、馬夫別に出身農家の階層構成をみるとその間に特別に著しい相違はないようである。

家庭の職業が農業でありながら自家の農業に従事しない者が45%もあり、従事する者とはほぼ同数となつていることも下の階層の出身者が多いことを物語っている。杣夫では農業に従事する者の方が多いが人夫、馬夫では逆に従事しない者が多い。

(10) 労働者は連年の各季節を通じて連続ないしは反覆して就労する傾向が強い。調査労働者の76%は2季連続、63%は3季連続している。杣夫の反覆性最も強く、馬夫、人夫の順となつているが、人夫でも半数以上が3季連続就労している。

自己の職業別に労働者の就労反覆性をみると林業専業者の反覆性がとくに強く、農業、日傭などがこれについている。林業では2季連続81%、3季連続73%となつている。なお、夏季だけ反覆就労する者は極めて少ない。

(11) 反覆就労した場合の就労場所をみると、地元が大部分である。すなわち、前年冬山では反覆就労者の77%、夏山では87%が地元で就労している。地元移動が多く、遠距離移動が少ないというわけである。杣夫は人夫、馬夫にくらべて遠距離移動の比率がいくらか高くなつている。

(12) 就労の動機は生計の主な手段が最も多く56%をしめ、生計の補助がこれについて40%である。その両方を合せると96%となり、この2つの動機が最も重要であり、その他の動機はあまり重要ではない。杣夫では生計の主な手段の比率がとくに高く、馬夫では生計の補助の方が逆に多くなつている。人夫ではこの2つの動機がほぼ同率となつている。杣夫、人夫、馬夫別にみたこの違いは職業別構成の差異にもとづくものと考えられる。

(13) 就労の動機を家庭の職業別にみると、林業、日傭、その他において、生計の主な手段と答えた者が最も多く林業はとくに72%となつている。農業と漁業とでは生計の補助が最も多い。農、漁業者の就労の副業性ないし兼業性のあらわれと考えてよいだろう。

家庭内の地位別にみると、世帯主では82%が生計の主な手段と答えているが、世帯主以外の者は生計の補助と答えた者の方が多い。とくに次三男は生計の主な手段と答えた者の比率は8%にすぎない。

(14) 労働者の就労の方法をみると、知人の紹介またはすすめ、例年の縁故など、何

らかの縁故関係による就労が大部分で、公開された市場からの供給が極めて少ない。杣夫、人夫、馬夫別にみてもその間に大なる差異はない。

就労の方法を自己の職業別にみた場合もその間に大なる差異はないが、林業專業者において他の職業の者にくらべて例年の縁故の比率が幾分か高く、知人の紹介またはすすめの比率が低い。

(15) 遠村および道外の出身者のみについてみると、遠方に来た理由は出身地附近に適当な仕事がないというのが最も多い。遠距離移動を毎年反覆する者が64%である。また30%の者は単独で移動するが、他は同伴者をもっている。2~10人の同伴者の場合が多い。

(16) 労働者の斫伐以外の林業労働経験をみると29%の人が造林、森林土木、製炭その他の経験を有するにすぎない。そのうちでも造林の経験者が最も多い。馬夫においては経験者は杣夫、人夫の場合に比していくらか比率が低いようである。

自己の職業別にみると林業專業者の経験数が農業などの場合よりも比率が低くなっている。この調査において林業專業者となつている者はむしろ斫伐專業者といった方が適当だということになる。農漁業者の経験数の比率が幾分か高いのはその兼業性と関係があると考えられる。

(17) 斫伐労働による賃収入の家計におけるウェイトはかなり高い。家計の全収入の91~100%の者最も多く労働者数の39%をしめている。家庭の職業が林業の者ではそれが71%にも達するが、農、漁業、日傭、その他では11~50%の者が最も多い。

VIII. 夏冬兩季斫伐労働の比較

調査の結果は以上のように要約されるのであるが、その結果を冬季斫伐労働者に関する調査結果と比較して、夏季および冬季斫伐労働のそれぞれの特徴をたしかめてみることにする。

冬季斫伐労働の調査*は昭和25年1月から2月にかけて行われたものであり、この夏季の調査は昭和29年8月から9月にかけて行われたのであるから、その間に4年半の年月のずれがあることになる。しかし、このくらいの年月の間に林業労働の諸条件や労働力の構造に根本的な変化が生ずるといふことは考えられないので、夏冬兩季を比較するためこの2つの資料を用いることは必ずしも無理ではないと思う。

冬季の調査で行われた労働の組織、労働者雇傭の方法、雇傭契約、賃銀制度、飯場制度、災害補償などに関しては夏季も余り変りがないと考えて、夏季には調査しなかつたので、この点に関しては比較することができないが、これらについては夏冬共通で変化がほ

* 加納・小關 前掲書

年齢階別にみると、冬山において年少者、高齢者のしめる比率が夏山の場合よりも幾分高めであるが、大体において両季とも青壮年の層に集中していることに変わりはない。職種別にみたとき、杣夫および馬夫においてこの傾向がとくに著しく、人夫において年少者の比率が杣夫馬夫よりも高くなっているのも夏冬共通している。

経験年数別にみると、両季ともに2~5年の者が最も多く、6~10年の者がこれについており、1年の者は比較的少ない。また、この傾向は職種別にみると、杣夫と馬夫においてとくに著しい。すなわち、逆にいえば人夫においては杣夫および馬夫にくらべると1年の者の比率がはるかに高くなっていることも夏冬同様である。一般的にいつて夏山の方が年数の長い者の比率が幾分高くなっているが（林業専門者の経験年数は農業者などよりも長くなっている。林業専門者の多い夏山の労働者は冬山より経験年数が多少でも長くなるのではないかと考えられる。）、これは著しい違いではなく、かなり似かよつた経験年数別比率となつている。すなわち、経験年数によつて技能的構造ないしは熟練度をみると両季の間に大なる相違はないといつてよい。

自己の職業別にみた経験年数の長さは冬山の場合の集計がないので比較し得ない。

斫伐労働力の構造を、性別、年齢別および経験年数別にみて夏山と冬山を比較すると、その間に多少の差異はあるが、とくに著しい相違は認められないようである。すなわち、これらの点に関しては夏冬両季ともほとんど同様な関係にあるといつてよいだろう。

つきに両季斫伐労働力の給源について家庭の職業別、出身地別、家庭内の地位別および給源農家の階層別にみた結果を比較してみると第33表の示すところである。

家庭の職業別にみると、夏山では林業専門者が約半数をしめて最も多く農業がこれについて35%であるが、冬山では農業が大部分、すなわち、72%にも達し、日傭がこれについて20%で、林業専門者は3%にすぎない。職種別にみると、杣夫と人夫では総数と同様に夏山は林業専門者が最も多く、冬山は農業者が最も多いが、馬夫は夏山、冬山ともに農業が最も多くなっている。夏山のみについて職種間の比率をくらべてみると、林業専門者のしめる比率が杣夫において一番高く、農業のしめる比率は馬夫において最も高い。夏と冬では、それぞれの比率の高さは著しく異なるが、冬山でも夏山と同様に林業専門者の比率は杣夫において最も高く農業の比率は馬夫において最高である。

職業別給源が夏山と冬山でこのように著しく異なつていることはとくに重要視しなければならぬ。斫伐労働の兼業性ということは冬山においてとくに著しく夏山は冬山にくらべて専門性が強いというわけである。

夏山においては、自己の職業別給源をしらべた結果、家庭の職業別の場合とくらべて、農業が大減少して林業や日傭が増加しており、夏山の専門性をさらに強めているが、この事実はさききのべた如く重要な意味を持つているものである。これに対し冬山の場合は自

第33表 夏冬兩季斫伐勞働力の給源 (比例數 %)

種 別			夏 冬 別		杣 夫		人 夫		馬 夫		總 數	
			夏 山	冬 山	夏 山	冬 山	夏 山	冬 山	夏 山	冬 山		
家庭の 職業別	林業	業	69	11	43	2	20	—	48	3		
	農業	業	23	65	35	67	65	94	35	72		
	漁業	業	4	8	3	2	—	—	3	3		
	日傭	業	2	15	8	27	2	3	5	20		
	その他	明	0	1	9	2	11	3	7	2		
	不計	明	2	—	2	—	2	—	2	—		
	計		100	100	100	100	100	100	100	100		
出 身 別	村 内	内 村	56	68	59	72	75	80	61	73		
	近 村	内 村	13	21	26	19	18	—	20	15		
	遠 道	村 外	22	1	9	5	7	20	13	8		
		外	9	10	6	4	—	—	6	4		
		計		100	100	100	100	100	100	100		
家庭内の 地位別	世帯主	主 男	—	—	—	—	—	—	59	37		
	長男	主 男	—	—	—	—	—	—	18	31		
	次男	三 男	—	—	—	—	—	—	4	1		
	三男	三 男	—	—	—	—	—	—	15	29		
	その他	三 男	—	—	—	—	—	—	3	2		
	不計	計	—	—	—	—	—	—	1	100		
農家の 耕地面積別	3町未満		33	12	36	11	36	9	35	11		
	3~6		60	69	46	76	48	66	50	71		
	6町以上		7	19	13	13	16	25	13	18		
	不明		—	—	5	—	—	—	2	—		
	計		100	100	100	100	100	100	100	100		
農家の 規模	耕地面積平均(町)		3.4	4.8	3.7	4.5	3.7	5.1	3.6	4.8		
	大家畜頭数平均(頭)		1.4	1.2	1.8	1.1	2.0	1.7	1.8	1.3		

己の職業と家庭の職業の異なる者が極めて少数であつたため、集計していないので夏冬兩季を比較することができない。

給源を出身地別にみると、夏冬兩季とも村内が最も多く、これに近村を加えると、いずれも大部分が地元出身ということになる。夏山の杣夫において遠村、道外出身者の比率が少しく高くなつてはいるほかは、夏冬兩季で出身地別給源は大なる差はない。

家庭内の地位別にみると夏山は半数以上が世帯主でしめられているのに対し、冬山は世帯主、長男、次三男がほとんど等しい比率を分けあつてはいる。冬山の長男、次三男の比率は夏山のそれにくらべてかなり高く、逆に世帯主は夏山より低くなつてはいる。これは夏

山において林業専門者のしめる割合が多いためであつて、夏山の比較的強い専門性がここにもあらわれているわけである。

なお、夏山では家庭の職業別に家庭内の地位を集計しているが、冬山では集計していないので職業別には比較し得ない。しかし、夏山の農業では世帯主 29%、長男 38%、次三男 28% となつており、これを農業が大部分の冬山の世帯主 37%、長男 31%、次三男 29% と比較するとかなりにかよつた分散関係を示している。これによつて農業出身の斫伐労働者は夏冬を問わずに、家庭内の地位別給源が上のような割合になると考えてよいだろう。

農家の階層別に見ると、夏山では耕地面積が 3 町未満の者が 35% をしめるのに対し冬山では 11% にすぎず、また、面積が大きい者の比率は夏山の方が冬山よりも少ない。大家畜頭数の平均では夏山の方が多くなつてはいるが、耕地面積の平均では夏山の方がはるかに小さくなつてはいる。概括的にいえば夏山では階層の低い者の比率が比較的多いのに対し、冬山ではかえつてそうではなく、むしろ中層以上からかたよつて供給されるという傾向がある。職種別にみると冬山では馬夫の階層が最も高いようであるが、夏山では必ずしもはつきりした傾向を示していない。

斫伐労働力の給源を家庭の職業別、出身地別、家庭内の地位別および農家の階層別にかけて、夏山と冬山を比較してみると、出身地別では大なる相違はなかつたのに対し、家庭の職業別、家庭内の地位別、および農家の階層別では夏冬の間の大なる差異が見出された。職業別給源と農家の階層別給源の相違はとくに著しいものがある。家庭内の地位別給源のちがいは元來は家庭の職業別給源の違いから由來したものであろうから、あまり重要ではないが、他の 2 つの相違は夏冬それぞれの斫伐労働の最も大なる特徴を形作つてはいるものでとくに注意されなければならぬ。

斫伐労働者の就労反覆状況と就労場所の移動状況について、夏冬両季を比較すると第 34 表の如くである。第 34 表に示したところは、表の註に示してある如く、数字を算出する経過に多少の違いがあるばかりでなく、表にあげた項目についても夏冬で範囲が違つてはいるので、厳密な比較にたえうるものではない。けれども大よその傾向はわかると思う。

第 34 表によると夏冬とも反覆性はかなり強いといふことができる。職種別にみると夏山では柚夫の反覆性が最も強く馬夫、人夫の順となるが、冬山では馬夫の反覆性最も強く、柚夫、人夫の順となつてはいる。人夫の反覆性が弱いのが夏冬共通してはいる。

就労場所の移動状況をみると、反覆ないしは連続就労者の大部分は地元で就労していることは夏冬変りがない。職種別にみると夏山の柚夫がいく分地元就労の比率が低いようであるが、一般に夏冬とも遠距離移動者は少ないと考えてよい。

斫伐労働者の就労反覆状況と就労場所の移動状況は夏冬両季でほとんど差がないとい

第34表 夏冬両季斫伐労働者の就労反覆と就労場所の移動 (比例数%)

種 別	夏 冬 別		柚 夫		人 夫		馬 夫		總 數	
	夏山	冬山	夏山	冬山	夏山	冬山	夏山	冬山	夏山	冬山
就 労 反 覆	2年(季)連続就労者數	91	71	66	57	77	88	76	67	
	3年(季)連続就労者數	70	64	57	47	68	83	63	59	
就 労 場 所 の 移 動	前一年(季)の同一村内就労者	68	83	82	79	85	92	77	83	
	前々年(季)の同一村内就労者	77	79	93	78	93	81	87	80	

- 注 1. 就労の反覆は、夏山では冬夏および夏冬夏の2~3季連続であるが、冬山は冬のみ2~3年連続である。
2. 就労場所は夏山は前季(冬)および前々季(夏)のそれであり、冬山は前年および前々年のそれである。
3. 就労場所の同一村内就労者は夏山の場合は、村内および近村を含む。冬山の前々年の同一村内就労者は3年連続者のみであるが、夏山のそれは連続者(夏冬夏)と反覆者(夏夏)を含む。

うことになる。

夏冬両季の斫伐労働を比較してみると、結局最も相違が著しくかつ対蹠的な形であらわれているのは職業別の給源と農家の階層別の給源である。

簡単にいえば、夏山では林業専門家が最も多く、農業者はこれにつき、しかも、農民の階層は比較的低い階層の者が多いのに対し、冬山では農業者が大部分で、その階層は中あるいは上の階層からむしろ多く供給されているということになる。斫伐労働はその特徴の一つとして兼業性ということがしばしば指摘されるのであるが、その兼業性は冬山にとくにあてはまることであり、夏山ではむしろ専門性が比較的強いということになる。

結 言

夏季斫伐労働者に関する調査結果と、それを冬山の調査と比較した結果の両方を通じて、夏季斫伐労働について最も特徴的であると思われることをあげるとつぎのようになる。

第1に、夏季斫伐労働力は林業専門家によつて約半数近くが供給されていることである。

元来、林業労働はその季節性にもとづいて、兼業性が強いということが特徴の1つとなつている。とくに北海道の斫伐労働は農民の兼業によつて行われていると考えられてきた。これは冬季の斫伐労働に典型的にあらわれているわけであるが、夏季には農業労働との競合によつて必ずしもそうではなく、すくなくとも兼業性が弱まるのではないかということが当然考えられるのである。

調査の結果はこれを裏書して、夏季斫伐労働者は林業専門家が約半数となり、兼業性

は著しく弱く、自己の職業別にみるとむしろ専門性が強いといつて良いくらいである。

兼業性が弱く、専門性が比較的強いということは兼業性の持つている社会経済的ないしは技術的制約から夏季斫伐労働が抜け得る可能性をもつているということを意味する。1例をあげれば、専門性が強いことによつて技術的な発展を予期することは容易である。また、兼業者は他に主な生活手段を持つているために劣悪な労働条件に耐えうるし、同時にそのような条件をおしつけられがちであるが、専門者が多くなることによつてこの制約から解放される可能性が増すと考えられる。

このように兼業性よりもむしろ専門性が強いということは、夏季斫伐労働の性格について、従来とはかなりちがった捉え方が要求されるものと考えられる。この意味で、専門者が比較的多いということは夏季斫伐労働の最も大きい特徴といわねばならない。

第2に、家庭の職業別にみた給源と自己の職業別に見た給源に著しい相違があることである。

家庭の職業が農業である者が自己の職業においては大減少して、反面、林業や日傭の者が著しく増加している。とくに林業専門者の増加が顕著である。すなわち、農家出身者で林業専門者や日傭専門者になつている者が非常に多いということをあらわしている。

冬季斫伐労働の場合、その給源の大部分は農民であつたが、この農業からの労働力の供給は農業人口の農業外流出を必ずしも必要としない。農閑期を利用する林業への就労は農業人口の一時的、季節的流出である。農民は農業と不離のまま、いいかえれば、生活の主な手段を農業におきながら、農業から片足だけをだすという形で斫伐労働に就労しているにすぎない。

しかし、この夏山の場合、家庭の職業が農業でありながら自分は林業専門者である者はもうすでに農業人口の一時的季節的流出ではなしに、比較的完全な農業外流出の過程にあるものと考えてよいのではないだろうか。もちろん、その流出の仕方はきわめて不安定であつて、直ちにもとの農業の中に潜在的過剰人口として、逆もどりする可能性は充分にあるが、兼業労働者の範疇をかなりこえたと思われるこれらの農家出身専門労働者の大量の存在は、斫伐の専門労働者というものが農業人口の農業外流出によつて形成されたことを暗示していると考えてよいだろうと思う。多少の論理の飛躍はあるが夏季斫伐労働者のうち、家庭の職業が林業である者についても、そのかなりの部分がこのように農民に由来して形成されたと考えることが許されるとすれば、林業専門者の究極の給源も結局は農民であるということになる。

林業の専門者が結局は農民を給源として形成されただろうということをおる程度立証するものとして、この事実は注目に値することである。

第3に、夏季斫伐労働に就労している農家の階層は比較的低いということである。

これは経営規模が小さいか、または家族労力の特別に多い農家でなければ、夏季に他の賃労働に従事することができないという事情から考えて当然の結果である。また、同時にこれらの低い階層の農家だからこそ、夏季にも賃労働に従事する必要があるのだということにもなる。そして、家庭の職業は農業であつても、自己の職業は林業專業であるという労働者の大半は、やはりこの階層の出身であるということになる。

冬山では給源農家の階層は意外に低くはなく、むしろ中ないし上層が多い傾向にあつたのと比較して、夏山は低いのが当然とはいいながらこれまた注意すべき事実である。

以上述べてきたところは北海道内の7斫伐事業地の労働者401人について事例調査を行つた結果である。事例調査ではあるが、その結果は北海道の夏季斫伐事業全般についてもあてはまるものと考ええる。

Summary

In the summer 1954, investigations were made of the actual state of forest labourers engaged in summer-logging in seven places of operation. These covered 401 labourers.

Some characteristics of summer-logging labour are as follows.

About half of the labourers make a speciality of logging. A third of the labourers come from farming families, and they belong in the comparatively low group of people as classified by economic conditions. Those labourers whose home-occupations are agriculture do not always engage in logging as a subsidiary business. Some of them specialize in logging.

The most part of the labourers come from communities neighbouring the forest areas; only a few of them come from distant places.

In winter-logging, the majority of labourers are farmers, and they belong in the comparatively high or middle groups.

The labourers in winter engage in logging almost entirely as a subsidiary occupation, and very few specialize in logging.

It is a marked characteristic of summer-logging labour that the trend of speciality in summer is very strong compared with winter-logging labour.